スーパーリアルロボット大戦

駆風 友

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スーパーリアルロボット大戦

【Ｎコード】
Ｎ４６５６Ｔ

【作者名】
駆風　友

【あらすじ】
２０世紀中頃、火星にて人類は初めて外敵と接触した。
同時に木星では膨大なエネルギーを秘めるエネルギー源を発見。
その恩恵で地球の文明レベルは爆発的に向上、本格的に宇宙へと進出した。
しかし、その科学力はミリタリーバランスをも崩し、世界各国で軋轢を生み、戦争や紛争を絶え間なく頻発させた。
そんな中、人類と異星生命体との戦闘は激しさを増す。

時代は２１世紀初頭。未曾有の危機の中、人類は生き残ることが出来るのだろうか？

参戦作品
マブラヴ　オルタネイティヴ
マブラヴ　オルタネイティヴ　トータル・イクリプス
機動戦士ガンダム００
コードギアス　反逆のルルーシュ
コードギアス　反逆のルルーシュＲ２
Ｚ．Ｏ．Ｅ
Ｚ．Ｏ．Ｅ　ｄｏｌｏｒｅｓ　ｉ
ＡＮＵＢＩＳ　ＺＯＮＥ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＥＮＤＥＲＳ
劇場版マクロスＦ　イツワリノウタヒメ
劇場版マクロスＦ　サヨナラノツバサ
蒼穹のファフナー
蒼穹のファフナー　ｒｉｇｈｔ　ｏｆ　ｌｅｆｔ
蒼穹のファフナー　ｈｅａｖｅｎ　ａｎｄ　ｅａｒｔｈ
魔装機神　ＴＨＥ　ＬＯＲＤ　ＯＦ　ＥＬＥＭＥＮＴＡＬ
バンプレスト版権
オリジナル

人物、機体辞典はこちら。ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ４７．ａｔｗｉｋｉ．ｊｐ／ｋａｋａｚｅｔｏｍｏ／

（要望があれば参戦作品が増える可能性があります）

第一話：白亜色の衛士（前書き）

今、人類の存亡を賭けた戦いの幕が上がる。

第一話：白亜色の衛士

日本・静岡エリア森林地帯にて。
『ヘルキャット1から各機へ。巣穴（ハイヴ）よりＢＥＴＡが浮上。数は闘士（ウォーリアー）級６、兵士（ソルジャー）級４。敵の斥候と思われる。十分に警戒しろ』
低い声音が狭いコックピット内に反響する。
「不知火（しらぬい）一機でやれますか？」
コックピット内で静かに目を閉じていた黒髪の青年がゆっくりと双眸を見開き呟くように言う。
『なんだ？　その機体を試したいのか？』
無線機からどこかおどけたような声が漏れる。
「ええ。ユニオンの技術力が如何程か、と」
青年はまた、無機質に呟くように言った。
『ならヘルキャット２、お前は俺の左翼に着け。ヘルキャット３は後方支援。ヘルキャット４はＥＷＡＣ（イーワック）で周囲の索敵を』
「「「了解」」」
ヘルキャットと呼ばれた衛士達が返答する。
『竜也、気持ちはわかるけど――』
「こんなところでも“姉を気取る”つもりか？　迷惑だ、よしてくれ」
『ごめんなさい――』
竜也と呼ばれた青年・ヘルキャット２はその急く気持ちを察した小隊員・ヘルキャット３に向かって冷たく言い放った。
「雨都竜也（あまつりゅうや）、“ナスカ”で左翼に着きます」
淡々とした口調と同時に、ナスカと呼ばれた白亜色の機体のウイングスラスター部に備わったバーニアが火を噴く。
すると、瞬時に先行していた隊長機である黒い機体、不知火・壱型丙の改良機に並ぶ。
『ウイングスラスターのバランサーはどうだ？』

「順調です」
やはり無機質さを感じさせる竜也の言葉に、隊長機から笑いが毀れた。
「これなら、ブリタニアとも互角に殺り合えます」
『おい、あまり新型を過信するなよ？　そのナスカ型は試作機だ、どんな問題が生じるかわからんからな。いいか？　俺がこのまま先行し奴等に先手を浴びせる。お前は、その援護をしてくれ』
「それは、奴等の介錯、ということですか？」
『不満か？　雨津准尉』
「いえ――」
どこか不服といった竜也の返答に、隊長は冗談めかして言った。
『安心しろ、近いうちに大きな戦いに参加することになる。憂さはそこで晴らせ、准尉』
「了解――」
無機質に返事を返す竜也の眼前のモニターにはまだ敵影は映っていない。
『お前、ソビエトは好きか？』
唐突に、隊長機からそんな言葉が漏れた。
「何故、そんなことを？」
竜也が聞き返すと、隊長は苦笑いしながら告げる。
『人革連が、お前を欲しがっている』
「人革連が？」
『ああ。どうだ？　この際他の国の空気を吸ってみるのも――』
すると、竜也は少し怒ったような口調になった。
「自分は、この国を愛しています。故に衛士となったのです」
『そうか。すまんな、いらぬことを聞いて』
「いえ――」
と、会話を交わしているうちにモニターに敵影が映った。
一九五八年、この竜也の眼前にいるＢＥＴＡ（Ｂｅｉｎｇｓ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｅｘｔｒａ　Ｔｅｒｒｅｓｔｒｉａｌ　ｏｒｉｇｉｎ

ｗｈｉｃｈ　ｉｓ　Ａｄｖｅｒｓａｒｙ　ｏｆ　ｈｕｍａｎ　ｒａｃｅ）と呼ばれる火星生命体と初めて遭遇した。
人類に対して悪意を持っているのか、一九六七年の月でのファーストコンタクトは大惨劇となった。
そして現在、彼等は火星よりこの星へと降下、今まさに人類を絶滅の危機へ追いやっている。
要するに異星からの外敵なのだ。
『ヘルキャット０、交戦の許可を下す』
「「「「ヘルキャット了解」」」」
四人の衛士は司令部からの通信に応えると各々の位置へ着いた。
『ヘルキャット４から各機。敵位置は３時の方向、距離１５０。こちらの行動に気づいたようです』
場違いな、まだあどけない少女の声が、ヘルキャット部隊の全員の無線機から漏れる。
『ヘルキャット１、ガンホー！』
砌、隊長機である不知火壱型丙改の突撃銃が火を放つ。
それらは眼前のＢＥＴＡへ命中すると、彼等を怯ませた。
「ヘルキャット２、突貫します」
戦況を確認すると、竜也はナスカの両肩に備わったＥ・カーボンブレードをそれぞれの手に握らせ、敵陣に突っ込んだ。
「この国を、お前達に渡しはしない――」
言いつつ二本のブレードを一閃。
すると、眼前で銃弾を浴びて痙攣していたＢＥＴＡ六体が同時に血飛沫を上げ真っ二つになる。
『これが、ユニオンの技術力――』
「この国だって、劣ってはいません」
隊長の感嘆の台詞に反論するように、ナスカは両手のブレードを投擲した。
回転しながら宙を舞うそれは、二体のＢＥＴＡを両断し地面に突き刺さった。

同時に今度は腰部に備えた軍刀を模様した刀を引き抜き構える。
これだけは、本来よりナスカに装備されている武装ではなかった。
間髪入れず背部ウイングスラスターを着火してブーストを掛け残りのＢＥＴＡに肉迫する。
そして一閃。
軍刀型の兵器は残りのＢＥＴＡを両断していた。
「我が国の技術の粋、暁月（あかつき）に断てないものは無い――」
刹那。先程斬捨てた筈のＢＥＴＡの一体が動く。
そいつは上半身だけで跳躍すると、ナスカへと迫った。
「チッ、仕留め損ねたか――！」
暁月と呼んだ軍刀を構え直すナスカ。
と、その横を巨大な弾丸が過ぎる。
それは、ナスカに迫っていたＢＥＴＡを射ち砕いていた。
『ヘルキャット３、目標を撃破！』
「いらんことを――」
自分の“義姉”の行動に舌打ちしていると、すぐさま無線が入った。
『こちらヘルキャット４、敵の全滅を確認』
『ヘルキャット０より各機へ。哨戒任務ご苦労だった。全機帰投せよ』
「「「「了解」」」」
こうして、ナスカの初陣は完勝で飾られた。

「どうだった？　竜也。ナスカの調子は？」
帰投したヘルキャット小隊は作戦会議室に集められていた。
全員、紺色の軍服に身を包んでいる。
その一人、先程の新兵器・ナスカのパイロットである竜也を始め、小隊メンバー全員が部屋奥に備わった大型モニターを見つめていた。

モニターに映るのは長髪の男。彼こそがナスカを開発した人物の一人である。
「良好だ。だが、あの大きな翼は接近戦時に邪魔になる」
「そうか、君の戦法は格闘戦主体だったね。今度グラハムと勝負させてみたいよ」
「そんなことはどうでもいい。ビリー、あの翼、なんとかならないのか？」
　すると、ビリーと呼ばれた男は困った顔を作った。
「あれは兵装の一部だからね。本来そちらの不知火やら吹雪やらのジャンプユニットを、それに代用しているわけだから、外したら長距離ジャンプが出来なくなってしまうよ」
「なら足で追い詰めればいい。背部バーニアだけで十分だ。近接格闘には無用だ」
「そうは言っても、ねえ――あれのお陰でこちらの“リアルド”をも凌駕する加速度を叩きだせるんだから。多少邪魔でも、敵との距離を瞬時に詰めるには必要不可欠な兵装だよ？」
「だが――」
「竜也。あまりカタギリさんを困らせないの」
　女性の声が竜也の文句を遮った。
「鈴那（れいな）、そっちの狙撃用ライフルはどうだった？」
「うん、完璧だった。コンマ1たりともぶれがなかったわ。でも、反動が大きいせいか発射後に照準が右にぶれるわね」
　鈴那と呼ばれたすらっとしたプロポーションの、長めの茶髪に小奇麗な顔立ちをした女性は笑顔で答えた。
「そうか、参考にするよ」
「用件は済んだか？　ビリー・カタギリ？」
　短髪を携えた体格のいいまだ若い男の野太い声が、暗い作戦会議室に木霊する。
「ああ、あと西（にし）大尉。一週間後にＡＥＵがラ・トゥール近辺で大規模な軍事演習を行うみたいだよ」

ラ・トゥールとはこの星に三基存在する、宇宙ステーション・オービタルリングに直結した軌道エレベーターの一柱のことである。
一九五八年、人類が火星でＢＥＴＡを発見した際、同時に木星では莫大なエネルギーを生み出す鉱石を発見していた。
研究者はそれを“メタトロン”と呼んだ。
メタトロンの無限に近いエネルギーは人類に飛躍的な科学技術を与えた。
その甲斐あって文明レベルは急発展を遂げ、２０世紀末には三基の軌道エレベーター、及び人類の新拠点となるオービタルリングの完成にまで至っており、人類が本格的に宇宙へと進出する礎となった。
それだけではない。メタトロン技術は軍事産業にも利用され、ＬＥＶ（レヴ）、モビルスーツ、戦術機、ＫＭＦ（ナイトメアフレーム）と様々な軍事兵器を生み出していった。
しかし、それ等は各国のミリタリーバランスを大きく変え、軋轢を生み、紛争や戦争を繰り返す要因ともなっていた。
こうして、人類の文明は飛躍的に進歩した反面、今やＢＥＴＡの侵攻もあり、地球は混沌の時代を迎えているのだ。
「それを餌にブリタニアを釣る気か？」
「そうだと思う。機体のデータは極秘で公開されていないから詳細はわからないけど、こちらのリアルドやそちらの不知火と肩を並べられるだけのスペックを持っているようだよ」
「そうか。そのデモンストレーションにお前は？」
「ユニオンの軍事顧問として招待されているよ」
「ならば後々感想を聞かせてくれ」
そこで、ビリーの面持ちが変わる。
「そのことなんだけど」
「なんだ？」
返す西大尉に、ビリーは険しい顔で告げた。
「君等日本帝国の軍事顧問も招待されていて」

「それは妙だな。ブリタニアを支持している彼等が我が国を招待するなんて」
「僕もそう思う――それだけ新型に自信があるんじゃないかな。だから見せ付けたい、と。その件で。君等ヘルキャット小隊を始めとした部隊に召集が掛かっているんだ」
「召集？」
鈴那が返すと、ビリーはきっぱりと言った。
「演習会場をＢＥＴＡから守る任務だよ」
「そんなのＡＥＵの部隊がやればいいじゃない？」
「首脳陣も、不知火を始めとした日本の最新鋭の技術力を見たいんだそうだ」
そこで西大尉は失笑する。
「まるで万国博覧会だな」
「まあ、そういうことだから、一週間後現地で」
「ああ」
それを境にモニターからビリーの姿がブラックアウトした。
「と、いうわけだ。諸君等ヘルキャット小隊には一週間後アフリカへ飛んで貰う」
通信が終るや否や、坊主頭の中年男性が低い声で告げた。
「質問ですが、栗林閣下（くりばやし）。同行する他の部隊の詳細は？」
西大尉が静かに尋ねる。
「明日の正午、演習を交えて会合がある」
「それはどこの？」
「ホワイトファングス――帝国斯衛軍（ていこくこのえぐん）だ」
「ええっ！！？」
驚く鈴那と言葉を失う西大尉。
「あの、斯衛軍とは？」
「そうか、君は“記憶を失っていた”んだったね。斯衛軍とは城内省直属の精鋭部隊のことだ」
「つまり、日本帝国最強の部隊ってこと」

小柄で白髪の色素の薄い、茶色い大きな瞳を持った可愛らしい作りの顔を持つ少女が部屋の隅っこで赤いライオンのぬいぐるみをいじりながらぼそり、と言う。

「無論、君とナスカにも活躍して貰う　」

そこで、栗林司令は声を引き締める。

「通達する。西秀樹(にしひでき)大尉、雨都鈴那(あまつれいな)少尉、雨都竜也准尉、氷川壬由(ひかわみゆ)曹長以上四名には一週間後にアフリカでの軍事演習の護衛任務に就いて貰う。うまくいけばブリタニアとの国交回復に繋がるやもしれん。心して掛かれ」

「「「「はッ！！」」」」

四人が敬礼すると、栗林司令は深く頷いた。

第一話：白亜色の衛士（後書き）

次回
帝国斯衛軍との模擬戦を繰り広げるヘルキャット小隊。
そんな中、遂にブリタニアが日本侵攻を開始する。
乱入するブリタニアの部隊に戸惑う帝国軍。
果たして、竜也は生き残れるのか？

（すみません！本当にすみません！スーパー系は出ないんですすみません！あと、設定を無理矢理くっつけたらこうなってしまいました。これではＵＣのガンダムが出せない；暫くはトータル・イクリプスと００、コードギアスが主軸で話が進みます。ご要望があれば参戦作品は増えるかも？ＳＥＥＤとか……続け！！）

第二話：帝国斯衛軍（前書き）

斯衛軍との模擬戦を控えた夜。食堂にて騒乱が起きる。

第二話：帝国斯衛軍

静岡基地・食堂にて。
「なあ、聞いたか？あの“硫黄島の亡霊”の小隊、斯衛軍とやり合うんだってよ」
「マジか？お気の毒」
「まあ、亡霊だからおとなしく供養されてこいってか？」
ひそひそと小声で会話をする声が、竜也の耳に入った。
「竜也、気にしないで」
苛立つ竜也を宥めるように、鈴那が呟く。
「あんた――何とも思わないのか？」
「え？」
「西大尉が馬鹿にされて、お前は何とも思わないのか？」
「それは――」
言葉を失う鈴那に、竜也はとどめを刺す。
「これでわかっただろう？　お前は、俺や西大尉のことを家族となんか思っていない。只のままごとをしているだけだ」
「そんなことないわよッ！！」
ガタッと席を立つ鈴那。
「なんだ？あの准尉さん、また雨都少尉を怒らせてんのか？」
「あいつはイカレた野郎だから仕方ねえよ」
「ママぁ、僕記憶がないのぉ！　って！　」
「だから“ママのこと殺しちゃった”のぉ～！　ってか？　あはは っ！」
竜也は黙っている。
まるで感情がないかのように。
だが、静かに。そう、静かに怒っていた。
珍しく怒りの篭った視線で挑発者を見つめていると、彼等はいきり立った。

「なんだぁ？　准尉さん。何か文句でも？」
「あるならお聞きしますが。“日本語”ならな。あははっ！！」
ドカッ、という轟音が食堂に木霊した。
彼等は竜也のブロックワードを言ってしまったのだ。
遂に立ち上がった竜也が殴りかかる前に、鈴那が彼等に殴り掛かっていた。
「てめえ！　何すんだ！」
「私は、竜也が“日本人じゃなくても”、喩え“母親を死なせていても”、それでも大事な家族だと思っているッ！！」
そう。雨都竜也という男は日本人ではなかった。その日本姓名はアラスカで彼と出会った西大尉が与えた名前で、本来の名は記憶と共に闇に中だった。
「やめろ！」
そこに割って入る竜也。
「てめえ！　このアマッ！！」
鈴那への打撃を、顔面に受ける竜也。
竜也は鈴那を庇ったのだ。
「竜也っ！！？」
「邪魔だ、どけえ！！」
「何をやっているッ！！」
そこに、この基地の准将・岡山（おかやま）が現れた。
「詳しい話を、聞こうではないか」

尋問の結果、鈴那と竜也を殴った衛士は一日間の独房入りとなった。
「すまない」
独房の格子越しに、竜也が呟く。
「いいのよ。私は正しいと思ったことをしただけ」

独房の中には体育座りで蹲る鈴那が。
「私は、貴方や西大尉、壬由を本当の家族だと思っているわ。それを侮辱されて、黙っていられるもんですか」
「姉さん――」
そこで、鈴那は失笑する。
「珍しくその呼び方、してくれるのね」
「今日は特別だ――」
そう言い残し、竜也はこそこそと独房を退散した。
「意地張っちゃって――ああ、明日の模擬戦、出れないわね――みんな大丈夫かな？」
鈴那は、どこか不安そうな面持ちになった。

翌日。
「こちらは三人、相手は五人――分が悪いな」
作戦会議室で西大尉が唸る。
「すみません大尉。俺がもっと上手く立ち回っていれば――」
「それは自惚れだよ、雨都准尉。お前が行動を起こさなくても喧嘩は起きた。お前一人が耐えたって何も変わらんさ」
「――」
かち、かち、と時計の針を刻む音が木霊する。
「もうすぐ、か」
「三人で勝てる作戦を考えましょう」
「――」
壬由が、ライオンのぬいぐるみを胸に抱きながら、ぎゅ、と竜也の軍服の裾を握る。
「大丈夫だ、何とかなる――」
そんな壬由に、抑揚なく言葉を掛ける竜也。
喩え抑揚がなくとも、その言葉は家族愛に満ちていた。

「大尉、ナスカのリミッターを解除して下さい」
竜也が提案する。
「駄目だ。あれは最後の切り札だ。模擬戦で使うものじゃない」
「俺は、鈴那の為にも――どうしても勝ちたいんです」
すると、西大尉は不敵に笑った。
「安心しろ。勝算はある」
その反応に、竜也は初めて驚きの相貌を作った。

間もなく、帝国斯衛軍の一個小隊が到着した。
白くカラーリングされた不知火が四機に、黄色い威風を放つ機体が一機聳えている。
「帝国斯衛軍――ホワイトファングス。なんだ、あれは。白い牙なのに黄色い機体なのか？」
「准尉。あれは“武御雷（たけみかづち）”。現状では我が国最強の機体だ。なめてかかると痛い目にあうぞ？」
竜也と西大尉、壬由がいる場所へ、パイロットスーツ姿の五人の斯衛軍衛士がやってくる。
「篁唯依（たかむらゆい）中尉であります。お会い出来て光栄です、“バロン西”」
「その呼び方はやめてくれ。それでは私の曽祖父が目覚めてしまう」
「喩え相手があの硫黄島の英雄の末裔でも、負けませんからね」
「少尉、口を慎め」
篁中尉が西大尉にへらへらと軽口を叩いた部下を否める。
「しかし、こちらは五人でそちらの小隊は三人。本当に大丈夫なのですか？　西大尉？」
「役不足かな？」
「いや――そういうわけでは――」
「では、始めよう。このエリアは最近ＢＥＴＡの出現が多い。模擬戦じゃすまなくなるぞ」

こうして、三対五の大ハンデの模擬戦が始まった。

「ヘルキャット４から各機へ。敵機は散開して攻撃を加えてくる模様。１２時前方に不知火が三機展開。距離８００メートル。正確な位置は特定出来ませんが森林地帯奥にも熱源、狙撃型（スナイパー）と思われます。その後方に武御雷が控えています」

「俺達の相手に武御雷は不要ということか？　舐めてくれるな――！」

珍しく、西大尉は高揚していた。

それは、帝国軍最強の部隊と手合わせ出来ているという誉な行為から来ているものだと思われたが、違った。

彼にとって、相手は何であろうと関係ない。

ただ、このゲームが自軍に大きなハンデがあるから燃えていたのだ。

西大尉は、追い込まれれば追い込まれる程熱くなる。そういう男だった。

『さあて。亡霊ちゃん。出ておいで――』

不知火三機が森林地帯を行く。

『迂闊に先行するなよ、加藤。ここは敵の領地――うわあああっっ！！？』

突如、足元の地面が崩れ、三機の不知火は開いた大穴にに飲まれた。

砌、木の上から大型のＢＥＴＡ捕獲用ネットが降ってくる。

『ブービートラップかッ！！』

『クソッ！　してやられた！！』

『亡霊めッ！！』

一気に三機を仕留めた西大尉の地の利を生かした戦術に、篁中尉は士気高揚していた。

「おもしろい――流石は硫黄島の英雄の末裔――！　まさか、私の出番が来ようはな！　ホワイトファング1からホワイトファング3へ。援護射撃を頼む。敵陣に突っ込むぞ！」
『了解！』
武御雷が駆ける。
脚部に備わったジャンプユニットが盛大に火を噴く。
木々をなぎ倒し、武御雷が轟雷のように迫る。
『こちらヘルキャット4、敵リーダー機が高速接近』
「ならば、相手をするまで」
スタンブレードを二本構えるナスカだったが、西大尉は言った。
「いいや、奴の相手は俺がする。お前は隠れているスナイパーを見つけ出せ。ウェポン・ウィスプを限定解除する」
「了解」
不知火改・ウラヌスの脚部ジャンプユニットが火を噴く。
迫る武御雷に、突撃を掛ける西大尉。
それを見送ると、ナスカの腰部から2基のU字型ユニットが射出される。
「網膜投影をメインからウィスプ1・2に移行――」
ウィスプと呼ばれたU字型の兵器は木々の間を縫って森林地帯を駆ける。
やがて、ウィスプは狙撃主（スナイパー）を捉えた。
『ば、馬鹿な！？　無線誘導兵器だと！！？』
「もう遅い――！」
ウィスプからマシンガンのように弾丸がスナイパーに放たれる。
『うわあああああッ！！？』
ペイント弾がスナイパーの頭部を赤く塗りたくる。
目を失ったスナイパーは、最早戦闘不能だった。
その頃。
「バロン西ッ！　実に面白い芸当でした！！」
武御雷が西大尉の不知火改・ウラヌスを捉えていた。

「そのような欧米被れした機体、我が国最強の鉄槌が砕く！！」
篁中尉の武御雷がスタンブレードを凪ぐ。
「チッ！？」
華麗かつ苛烈な一撃は、ウラヌスの側面を掠めていた。
「交わした！？」
「私とて、伊達に愛馬に“曽祖父の名馬”の名を付けたわけではないよ」
反撃に転じる西大尉。
トリガーを引き絞り、機体右腕に備わった突撃銃を連射する。
「“硫黄島の亡霊”の名は伊達ではないか！！」
放たれたペイント弾をシールドで防御しつつ、武御雷は脚部ジャンプユニットに火を入れて前方へ高速突進。
一気に距離を詰める。
「その呼び名は好まんな――何故なら、私はまだこうして生きて君と戦っている」
「失礼しました、バロン西！　こうしてお手合わせ願えて光栄です！！」
性能は不知火を極限まで強化したウラヌスといえど、武御雷に劣っていた。
「君は生粋の日本軍人だ。君のような者が斯衛軍を務めれば、この国の未来も明るい」
武御雷のスタンブレードと、ウラヌスのスタンブレードがぶつかり合う。
ばちばち、と眩い閃光を放ち交差する二本の剣。
閃光で目を歪める篁中尉。
この隙を、西大尉は逃さなかった。
操縦桿を握る手に力を込め、その横に設置された赤い小さなスイッチを起動する。
「リミッター限定解除。コンバットパターンＡ、マニューバＨＡＨ！」

刹那に消えるウラヌス。
「ど、どこへ！？」
動揺する篁中尉。
彼女の頭上に、西大尉はいた。
容赦なく上空からペイント弾が降り注ぐ。
「クッ！？　上か！！」
ジャンプしようと試みる武御雷だったが、ペイント弾の破片がジャンプユニットに入り込み、故障させていた。
「なッ！？」
「ヘヴン・アンド――」
砌、ウラヌスの左腕から巨大なアンカーが射出される。
それは、武御雷のシールドに突き刺さり、それを握ったままの彼女を宙に放り投げた。
「なんて馬力――！？　この武御雷の重量を凌駕した、だと――！？」
瞬時に地面に滑り込むウラヌスは、今度は下部から攻撃を行った。
「ヘルッ！！」
下部から降り注ぐペイント弾が、遂に武御雷の頭部を捉えた。
「これが噂に聞くマニューバ・ＨＡＨ（天国と地獄）！！？　くッ！？　メインカメラが！！？　だが――！！！」
その時。篁中尉は思いがけない行動に出た。
なんと、コックピットハッチを開いたのだ。
西大尉の双眸には先程見たパイロットスーツを着た若い女衛士の姿が映る。
「これなら――見える！！！」
本来、戦術機のモニターと衛士の目は網膜投影という形をとり結合している。
篁中尉はそれを無理矢理解除し、モニターの目から自分の目での視界把握に切り替えたのだ。
「無茶な――！？」

彼女の突拍子もない行動に驚愕する西大尉。
「はあああああああああああああああッッ！！！」
落下しつつ、スタンブレードを一閃。
「クッ！？」
その一撃はウラヌスの頭部を捉えていた。
頭部メインカメラをやられ、不時着し膝を着くウラヌス。
「やる――」
「バロン西。この勝負、引き分けです。お互い“頭”を失った。ならば、最早双方の部隊は機能しません」
「そうだな――」
その時だった。
弾丸が森林地帯を奔り、武御雷を捉えた。
「な！？　実弾！？」
それは、訓練用のペイント弾などではなかった。
『司令部から総員へ！　誰だ！　実弾の使用は許可していない！！』
各々頭部に備わった無線機に、栗林司令の声が響く。
「違う――私達じゃない――！」
戸惑う篁中尉だったが、その銃撃の主は間もなく現れた。
『ヘルキャット４から各機。熱源は３。位置は１０時の方向、距離２００メートル。識別反応はいずれもブリタニア製のものです』
「ブリタニア！？　グラスゴーか！！」
大声を上げる西大尉だったが、メインカメラをやられたせいで彼等の正確な位置を捉えられないでいた。
「大尉、これは――！」
スナイパーを倒し、西大尉と合流した竜也が問う。
「ブリタニアだ！　ブリタニアの侵攻が始まったんだ！！」
「なんだって――！？」
『こいつはいい――訓練で疲弊している！　斯衛軍を叩く絶好のチャンスだ！！』
ブリタニア製のＫＭＦ（ナイトメアフレーム）・グラスゴーが三機、森林から躍り出た。

「すまん、准尉――網膜をやられた――目の故障でどうにもならん――」
「なら、俺一人でやります」
意を決したように訓練中は使用不可だった軍刀・暁月を抜刀し構えるナスカ。
「いいか？　これはＢＥＴＡとの戦いではない。今からナスカの対機戦リミッターを解除する。勝手は違うが、上手くやってくれ」
「了解」
「バロン西？　あの欧米被れの機体一機でどうこうなるはずが――」
篁中尉が言うと、西大尉は不敵に笑った。
「それがなるのさ――准尉！　コンバットパターン2、“一閃”だ」
その声に呼応するかのように、ナスカは暁月を構える。
『馬鹿め！　たった一機で我々を止めようなどと！！』
三機のグラスゴーが突撃銃を斉射する。
だが、そこにナスカはいなかった。
『何ッ！！？』
ナスカは背部ウイングバインダーを着火し、グラスゴーの小隊の中を駆け抜けた。
そして回頭（ターン）。振り向きざまに一機を斬り裂く。
『ぐあッ！！？』
グラスゴーから苦悶の声が上がる。
「見せてやる――暁月の真の姿を」
刹那。暁月の刀身が巨大化した。
それは、ナスカの全長の二倍はあるかと思われた。
『な、なんだ――！？』
「テロは嫌いだ、一瞬でカタをつけるぞ、テロリスト共」
そのまま、背後を取った姿勢で巨大化した暁月を振りかざす。
巨大な刃は、グラスゴー三機を大地ごと砕いた。
『ひいいいいいッ！！？』
辛うじて生き延びたブリタニア兵三人がコックピットから飛び出

てくる。
「お前等のような奴がいるから――」
ナスカが再び刀を振り下ろそうとした時。
「やめろ、准尉」
「篁中尉殿！？」
我に返ったかのような声で自分の機体の動きを制した武御雷を見つめた。
「戦術機はＢＥＴＡと戦う為のものだ、戦闘不能の人間を殺す為の兵器ではない」
「――！」
刃が元の長さに戻った暁月を鞘に納める竜也。
「それが、メタトロンブレードですか、バロン西？」
「そうだ。対ＢＥＴＡ戦だけでなく対機戦用に開発された我が静岡支部の切り札だ」
『ヘルキャット４より各機へ。ブリタニア側の熱源無し。我が方の勝利です』
「――」
竜也は黙って自分が両断したグラスゴーを見つめていた。
「准尉。これが戦争だ。我々は、ＢＥＴＡだけではなくああいう連中も相手にせねばならんのだ」
竜也は気づいた。トリガーを握る手が震えていることを。
それは、何の躊躇いも無く敗残兵に刃を振るおうとしたという行為に怯えていたからだと理解した。
「体が、勝手に――俺は、人を殺す術を知っている――？」
その行為こそが、彼の記憶の底に眠る過去を紐解く鍵となるのでは、と陽光を浴びて白亜色に鈍く輝くナスカを見つめ、西大尉は思った。

第二話：帝国斯衛軍（後書き）

次回。
遂にアフリカへと渡るヘルキャット小隊とホワイトファングス。
そこに、ＢＥＴＡとは別系統の異星生物が襲来する。
人の心を読む彼等に、人類は勝ち目はあるのだろうか。

（三話目にして早くもファフナーのお目見えです。でもノートゥングモデルではなくティターンモデル、つまりファフナー本編の前に当たる話です）

第三話：あなたは、そこにいますか（前書き）

アフリカへ向けて出発する日本帝国軍。だが、その道中には思いもかけない敵が待ち受けていた――

第三話：あなたは、そこにいますか

翌日、ヘルキャット小隊は合流したホワイトファングスと共に空母で日本を旅立った。

かつて最高とされた原子力動力炉に代わりメタトロン鉱石を用い、空間圧縮による高速移動、ウーレンベック・カタパルト航行機能を搭載した初めての艦が、この“モロボシ”である。

本来は十日以上掛かるアフリカまでの航路を、わずか五日で航海してしまう。

船上には数機の戦術機が配備されている。

これから、アフリカ軌道エレベーター、ラ・トゥールで行われる軍事演習の警備に当たる為だ。

「気持ちが悪い――」

甲板で、夕空の太平洋を見つめる竜也。

その顔は青ざめている。

「何だ？　船酔いか？」

そこへ、西大尉と鈴那、壬由がやってくる。

「はい――大尉は篁中尉殿とチェスの試合中じゃなかったのですか？」

だるそうに言う竜也に、西大尉に代わり鈴那が笑って答えた。

ちなみに、鈴那の独房入りは解け、こうして共にメタトロン空母に乗っている。

「十戦中十勝、大尉が全部持っていったから出て行っちゃった。気を悪くしたみたい」

つまり、いじけたということか、と竜也は思った。

西大尉はチェスの名人としても静岡支部では知られていた。

それに、無謀にも挑んだのだろう。「憐れなことだ」と竜也は小さく呟いた。

「綺麗な夕焼け――」

水平線に沈み行く夕日を眺めつつ、溜息を吐くように鈴那が言う。
「ほんと――」
赤いライオンのぬいぐるみを抱いた壬由も感嘆の声を漏らす。
「この美しい世界が、今滅びようとしている――それを、忘れるな。この景色をその目に刻め。そして、この景色を守る為に戦うんだ」
と、大尉が言ったその時だった。
『衛士各員に通達！　海上にアンノウンが出現！　直ちに迎撃せよ！』
「アンノウン！？　迎撃！？」
驚く鈴那に、西大尉は冷静に言った。
「こちらの警告もあったろうに――アンノウン？　どこの国の機体だ――？」
双眼鏡を取り出し洋上の景色を見据える大尉は、驚愕の声を漏らした。
「なんだ、あれは――！？」
竜也と鈴那も双眼鏡を取り出し洋上奥を見つめる。
すると、レンズには金色の異形が映っていた。
それは、背中に光背のようなものをそなえ、上半身のみ人間の形をした化け物だった。
その異形が二体、このメタトロン空母に迫っていた。
「大尉！　あれは――」
そこへ、篁中尉が駆け寄ってくる。
「新種のＢＥＴＡ――？　いや、違う――もっと他の何かだ」
「ＢＥＴＡじゃ、ない――！？」
驚きを隠せないといった篁中尉だったが、すぐに頭を切り替えた。
「迎撃します！　本懐を成しえぬ前に死ぬわけにはいきません！！」
「待て、中尉。まだ敵と決まったわけでは――」
刹那。先行した他の部隊の不知火が金色の異形に攻撃を仕掛けられた。

彼ないし彼女はその手に紫色の球体を作ると、不知火に向かって投げつけた。
それは、まるでブラックホールのようだった。
被弾した不知火の下半身が、まるでコルク栓を抜いたかのように抉られていた。
『うわあああああああああああッ！！？』
「前言撤回。あのアンノウンを叩く！！」
「「「「了解！！」」」」
西大尉を始めとしたヘルキャット小隊と、篁中尉の部隊・ホワイトファングスが直ちに迎撃体勢に入る。
各々すぐさまパイロットスーツに着替えると機体に搭乗、次々と上空へと舞い上がった。
『こちらホワイトファング1。ホワイトファング2、4、5は先行しろ。フォーメーションTだ』
『『『了解！！』』』
ホワイトファング小隊の三機がT字型の陣形をとり先行する。
『この化け物め！！』
T時に夕空を裂く不知火の手に握られた突撃銃から、無数の弾丸が放たれる。
弾丸は異形のいる足元の海面を穿った。
牽制射撃だ。
『これ以上近づくなら一切の容赦はしない！！』
突撃銃を構えるホワイトファングスの不知火三機。
だが、止まらない。
異形二体はそのまま海面を進んだ。
『構わん！撃てえッ！！』
再び轟音とマズルフラッシュを刻む三挺の突撃銃。
しかし、弾丸は見事軌道を読んでいるかの如く回避される。
『『『何ッ！！？』』』
「ヘルキャット4からヘルキャット各機。敵影は2、いずれも2時

の方向。距離１０００。データ解析完了、送ります」
ＥＷＡＣで索敵した壬由の声が、たった今解析した敵データと共に各機のコックピットに送られる。
『なによ、これ――体組織の９９パーセントがケイ素って――！』
『シリコン生命体――どうやら、ＢＥＴＡとは異なる存在のようだ』
「どうします？　我々も仕掛けますか？」
静かに尋ねる竜也に、大尉は待てと言った。
『今ホワイトファングスが攻めている。お手並み拝見といこうじゃないか』
勝負は一瞬でついた。
弾丸を交わした謎のシリコン生命体はその体から金色の触手を伸ばすと、不知火三機を拘束していた。
『『『なッ！！？』』』
『加藤！　南田！　岩沢！　このおッ！！』
操縦桿を握る手に力を込める篁中尉。
すると、後方で待機していた彼女の武御雷のジャンプユニットが火を吹いた。
高速でシリコン生命体へと迫ると、部下を拘束した触手をＥカーボンブレードで切断した。
と、その時。
『あなたは、そこにいますか？』
シリコン生命体の声らしきものがヘッドギアの無線機に流れる。
「喋った？」
『しかも日本語を――』
皆、驚きを隠せなかった。
竜也と鈴那の会話を他所に、篁中尉は異形に斬り掛かった。
『私がどこにいようと、お前等には関係ないッ！！』
武御雷がＥカーボンブレードを一閃する。
だが、その行動がお見通しだったかの如く、二体のシリコン生命体は斬撃を回避した。

『何！？　この距離で交わされた――！？』
砌、再び敵の手から紫色の球体が放たれる。
それは、間一髪交わした武御雷のＥカーボンブレードを飲み込んでいた。
『クッ！！？』
『隊長！！』
後方から巨大な弾丸が飛来する。
そう。後方に控え狙いを研ぎ澄ましていた狙撃手（スナイパー）だ。
しかし、その弾丸も容易に交わされてしまう。
『何だって――！？　まるで、こちらの動きを読んでいるかのようだ――！！』
狙撃手（スナイパー）は相手の能力に戦慄した。
尚も、シリコン生命体の攻撃は続く。
『あなたは、そこにいますか？』
『私は――』
それは、精神攻撃のようだった。
問いかけ、相手の心を覗き見る。そんな攻撃だ。
『やめろ！　やめろやめろやめろ！！　私の心を覗くなあああああッ！！！』
『ヘルキャット１より各機へ。ホワイトファングスを援護する！！』
『『了解』』
ヘルキャット小隊が、ジャンプユニットを点火してシリコン生命体に迫る。
その時だった。
『ヘルキャット４より各機及び司令部へ。この区域に高速で接近する機影あり。数は３。１時の方向より人革連――ソビエト機１、あと３０秒で接触。５時の方向より所属不明機が２。こちらはあと６０秒で当エリアに到達』
『ソビエト、だと？』
『おまけに所属不明機！？』

驚愕する西大尉と鈴那の眼前に、間もなく乱入者は現れた。
『Ｓｕ－３７ＵＢか（チェルミナートル）！？』
西大尉が、機体を見て叫んだ。
『こちらイーダル１。貴君等を援護する』
各員のヘッドギアに、女の声音で言葉が木霊した。
『ソ連が援護？　どういう風の吹き回しだ？』
疑心する篁中尉に、西大尉は淡々と告げる。
『恐らくこいつ等のデータ収集が目的だろう』
言っている間に、チェルミナートルは機銃を連射し異形を追い詰める。
手馴れたものだった。
ホワイトファングスを手玉にとった異形がまるで赤子のようだ。
「ほぅら、終わりだよ！」
やがて、接近すると腕部に備わったＳカーボン製のスパイク・ベーンを突き立てる。
すると、シリコン生命体は金色の光を失い紫色になって崩れ落ちた。
どうやら意識を失ったようだ。
それを抱えると、チェルミナートルは高速で戦域を離脱した。
『やはり、あいつ等のデータ収集が目当てだったか――』
「所属不明機は――？」
竜也が目をやると、いつの間にか現れた赤い見慣れない機体が二機、巨大なブレード状の武器をもう一体のシリコン生命体の腹部に突き立てている。
刹那、その剣身が真っ二つに開く。
砌、その割れ目からビームが放たれる。
「馬鹿な！？　人型兵器が光学武装を！？」
驚く竜也を他所に、戦いは終っていた。
体を二門のビーム砲で貫かれた異形は、今度は自身が紫色の球体となり消滅した。

『動くな。諸君等の所属を言ってもらう！』
赤い乱入者二機に銃口を向けるウラヌス。
すると、二機は水中へと沈んだ。
「逃げるつもりか！？」
『単機で潜水！？　何なのよ、あいつ等――！』
『戦術機では追跡は不能、か。まるで未知の塊だな、この海域は』
竜也と鈴那に冗談めかして言った西大尉だったが、彼は新たに現れた異種生命体の存在を確かに懸念していた。

「もう、おわり？」
太平洋上を北に飛空するチェルミナートルのコックピット内に、少女の声が木霊する。
「終ったよ、イーニァ。あとはこれからこいつをスミルノフ中佐のところへ持っていくだけ」
「クリスカ――わたし、この子、こわい――」
クリスカと呼ばれた女性衛士は、複座型のコックピットで前方に控え、震えるイーニァと呼んだ少女の後ろ姿を見て、優しい笑顔を作った。
「大丈夫。怖くないよ。イーニァは私が守るから。絶対に守るから。ね？」
「うん――」
（そうだ――イーニァを脅かす奴等は、みんな私が始末する――！）
優しい笑顔が一変、にやり、とクリスカの口元に邪悪な亀裂が奔る。
そんな二人を内包し、夕闇の中、チェルミナートルは異形の亡骸を抱えたまま、洋上の自軍の母艦に向かって飛行していった。

「これでよかったのか？　総士？」
海中を赤い機体が二機進む。
そんな機体から、少年の声が漏れた。
「あいつ等、国連軍じゃなかったみたいだけど？」
今度は少女の声が。
「国連軍でないにしろ、今は“竜宮島”の所在とこちらの“ファフナー”の“コア”のデータを知られるわけにはいかない」
総士と呼ばれた少年の声が、赤い機体のコックピット内に反響する。
「竜宮島は、まだ楽園でなければならない――よって、“Ｌ計画”も早めなければならない。二人共、頼むぞ」
その言葉は、どこか悲壮に満ちていた。

第三話：あなたは、そこにいますか（後書き）

次回。
アフリカ・軌道エレベーター近辺で行われるＡＥＵの軍事演習。
新型の強烈なまでの力を見せ付けるＡＥＵだったが、そこに突然の乱入者が。
彼の額には“ＧＵＮＤＡＭ”と書かれていた。

（次回、遂にガンダム登場です。ソレスタルビーイングを名乗る一派は、この戦争を根絶出来るのか？続く！！）

第四話：楔を打ち込む者たち（前書き）

アフリカに到着した竜也達は演習場付近の哨戒任務に当たっていた。そんな中、圧倒的なパワーを見せ付けるＡＥＵの新型だったが、そこには別の機影が接近していた。

第四話：楔を打ち込む者たち

五日後。
アフリカ北部・軌道エレベーター近辺。
「なんとか間に合いましたね」
そう言う竜也に、西大尉はウラヌスのコックピット内で頷く。
竜也達は会場東のエリアに戦術機とともに配備されていた。
『メタトロンとは、恐ろしいものだ』
西大尉がしみじみと言う。
『言い忘れていたことがある』
と、唐突に、西大尉が言う。
「なんです？」
聞き返す竜也に、大尉は意を決めたかのように告げる。
『お前の機体、ナスカは対ＢＥＴＡの切り札だ。それは知っているな？』
「はい」
『何があるかわからん、お前に最終リミッター解除コードを教えておく。これで、人類の明日を切り開け』
ナスカのコンソール装置に何やら暗号ファイルが転送された。
「大尉、貴方、まさか――」
竜也には不吉な予感がした。
『いや、一応念のためだ。世の中何が起こるかわからんからな』
その時、演習が始まった。
メインカメラには、緑色の戦闘機にも似た機体と、四機ＡＥＵヘリオンが映し出されている。
その、新型機はあっという間に四機のヘリオンを撃墜した。
『凄い性能ですね――』
鈴那が感嘆の声を上げた。

「モビルスーツ、イナクト。ＡＥＵ初の太陽エネルギー対応型か」
「ＡＥＵは軌道エレベーターの開発で遅れを取っている。せめてモビルスーツだけでもどうにかしたいのだろう」
会場内に設けられた観戦所で、長い茶髪の男と金髪の男が会話を交わしている。
「おや、いいのかい？ＭＳＷＡＤのエースがこんな場所にいて」
「勿論、よくはない。この私も、本来ならＢＥＴＡ出現の警戒に当たらねばならんのだからな」
金髪の男は冗談めかして言った。
「それはよくありませんね、中尉殿。私共の国の戦術機はきちんと定刻通り現地入りをして哨戒任務に就いているというのに」
「君は？」
金髪の男が尋ねると、今しがた文句を言った肩で髪を切り揃えたどこか理知的な女性は堂々と答えた。
「国連軍横浜基地副指令・香月夕呼（こうづきゆうこ）と申します」
「貴女があの“オルタネイティヴＩＶ計画”の最高責任者の――」
長髪の男が驚いていると香月夕呼と名乗った女性は微かに笑んだ。
「ご存知でしたか。最も、最高責任者と言えど、主に計画を進めているのはオブザーバーである白河愁博（しらかわしゅう）士ですがね。ご一緒しても？」
「どうぞ」
長髪の男が言うと、夕呼は彼の隣席に座った。
「如何です？　ＡＥＵの新型の感想は？」
「貴女のような天才科学者の前では迂闊なことは言えませんよ。ですが、デザインだけは独創的だと申しましょう」
金髪の男がまたしても冗談めかして言う。
『そこ！　聞こえてっぞ！　今、嫌味を言いやがったな！？』
砌、会場内にイナクトのパイロットの声が反響する。
「集音性は高いようだな」

「みたいだね」
金髪の男と長髪の男は顔を合わせ笑った。
と、その時。
「あれは？」
三人の上空に、緑色の粒子を振りまく何かがいた。

『ヘルキャット４から各機へ。上空から飛来する影あり』
壬由のＥＷＡＣ搭載型不知火が、突如それを捉えていた。
『何？レーダーには何も映っていないが――？』
西大尉が声を上げる。
『こちら篁。そちらでも視認出来ましたか？』
そこに、西方面を護衛していた篁中尉から通信が入る。
「なんだ？あの機体は――？」
竜也が上空を見上げ、呟く。

「“エクシア”、目標地点に到達。ＧＮ粒子の散布状況、作戦通り」
その機体は上空から飛来すると、イナクトのいる演習場に降り立った。
『ああん？　なんだあ？　あの機体は――？』
驚くイナクトのパイロットを他所に、アンノウンの機体は凛と立っていた。
「モビルスーツ！？　すごいな、もう一機新型があるなんて――」
長髪の男が感嘆の声を漏らす。
「そうではないみたいですよ？　あれ、ＡＥＵの機体じゃないようで」
夕呼が言う。

「どうしてでしょうね。ここまで接近を感知出来なかったなんて――」
「あのモビルスーツの発する光――何だ――？」
夕呼の言葉を遮るように、金髪の男が声を上げる。
『目標対象確認。予定通り、ファーストフェイズを開始する』
『おいおい、どこのどいつだ！？　ユニオンか！？　ブリタニアか！？　それとも人革連か！？ま、どっちにしても他人様の領土に土足で踏み込んだんだ。只で済むわけねえよなあ！！』
カーボンブレードを構えるイナクト。
「イナクトのパイロット、仕掛ける気か――！？」
「パトリック・コーラサワー。ＡＥＵのトップガンね。果たして今回も戦果が上げられるかしら」
金髪の男の驚嘆に、夕呼は冷静に言った。
『貴様！　俺が誰だかわかってんのか！？　ＡＥＵのパトリック・コーラサワーだ！　模擬戦でも負け知らずのスペシャル様なんだよ！　知らねえとは言わせねぞ！？』
『始まる――』
アンノウンが、手にしたブレードを構える。
『な、なんだ！？　やる気か、てめえ！！』
『エクシア、目標を駆逐する』
アンノウンが動く前にイナクトが動いた。
『てめえ！　生意気なんだよおッ！！』
カーボンブレードを振るイナクトだったが、アンノウンは容易に交わす。
そして、手にしたブレードで一閃。
それだけでアンノウンはイナクトを圧倒した。
次々とパーツを刻まれるイナクト。
『俺は！　スペシャルで！　２０００回で！　模擬戦なんだよぉぉぉぉッ！！』
遂にイナクトは倒れた。

「あら、まあ――」
にやり、と見つめる夕呼。
「あの機体の額に刻まれた文字――“ＧＵＮＤＡＭ”――！　あのモビルスーツの名前か！？」
金髪の男が大声を上げる。
「ガンダム――」
長髪の男が金髪の男の口にした名前を復唱する。
『エクシア、ファーストフェイズ終了。セカンドフェイズに移行する』
すると、軌道エレベーター内からヘリオンの編隊が現れた。
『やはりＡＥＵは、非武装と決められている軌道エレベーターの中にまで軍事力を――』

『ユニオン、及び日本帝国軍に通達！　我が軍と連携してアンノウンを迎撃せよ！！』
目を丸くしながら観戦していた竜也のコックピット内にＡＥＵ上層部からの通達が入る。
『行くぞ、准尉。少尉。我々日本の力を見せてやろう』
『了解！』
勢いよく返事を返す鈴那。
ウラヌスと不知火の脚部ジャンプユニットが火を噴く。
同時に、ナスカの背部バーニアが点火された。
超速でウラヌスや不知火を追い越していく。
『准尉！　出すぎだ！　戻れ！！』
西大尉の言葉は、最早聞こえていなかった。
「緑色の粒子――ＧＮ粒子――ガンダム――俺は、あの機体を知っている――！？」
竜也の記憶の中で、ガンダムという名のアンノウンの存在が呼び

起こされる。
「そうだ、俺は、“イノベイター”・“カヴァー・リインカーネイト”――！」
そう、言うと竜也はガンダムに突撃をかけた。
『日本帝国の新型か――』
ブレードの切っ先をナスカに向けるガンダム。
「ガンダム！　その行いは誰が肯定する！！？」
何かに取り憑かれたかのように人格が豹変している竜也は叫ぶようにガンダムに問いかける。
『――！！ガンダムの名を――知っている？　何者だ？』
腰から暁月を抜刀すると、ガンダムに振りかざした。
「答えろ、ガンダム！　お前等の導く未来は正しいのか！！？」
両者のブレードが交差する。
『マイスターに敗北は許されない――！』
「答えろ！　ガンダム！！　お前等の力は“来たるべき対話”へと人類を導くのかッ！！？」
『何者だ、貴様――！』
砌、ナスカの脚撃が放たれる。
それを受け、後退するガンダム。
「お前等は――」
その時だった。
ガンダムの腹部を狙って攻撃を繰り出したナスカの頭部が爆ぜた。
「うわあああああああッ！？目が――ッ！？」
網膜をやられ、苦痛に喘ぐ竜也。
『遠距離射撃による援護――“ロックオン・ストラトス”か』
会場の奥に目をやるガンダム。すると、そこにはライフルを構えた緑色のガンダムが存在した。
次の砌、動きが止まったナスカを、ガンダムは袈裟斬りにして撃墜した。
『竜也！　竜也ぁ！！？』

真っ二つになったコックピット内にノイズ混じりの鈴那の声が響くが返答はない。
『竜也！　チッ！！』
ようやく戦場へと到達したウラヌスの中で、西大尉は舌打ちした。
『ははは、こりゃ流石の刹那（せつな）でも手を焼くか？　そいつはなんだ？　ガンダムを知っていたようだが？』
『フシンシャ！　フシンシャ！』
刹那と呼ばれたガンダムのパイロットは、ロックオンと呼んだ仲間に返す。
『わからない――だが、この感覚――“ティエリア・アーデ”に似ている――』
すると、ロックオンは大笑した。
『まさか身内ってか？　どうする？　連行するか？』
『その必要はない。セカンドフェイズ――こいつを始末する』
『穏やかじゃないのな』
地面に伏せるナスカにガンダム、エクシアが迫る。
と、その時だった。
『この反応――ＢＥＴＡか――！』
ロックオンが舌打ちする。
『“スメラギ・李（り）・ノリエガ”からの通信だ。セカンドフェイズ緊急終了、サードフェイズに移行しろとのことだ』
『人類に変革を齎す力は、やっぱＢＥＴＡ迎撃にも必要ってか？』
『出現が予測されるのは要撃級（グラップラー）だ。連携して迎撃を』
『只でさえの混戦の中に、か。しゃあない。刹那、ＢＥＴＡを迎撃するぞ』
『了解』
『さあて、行くぜ、ハロ。“ガンダムデュナメス”、ロックオン・ストラトス、狙い撃つぜ！』
身構えるガンダム二機。
『アンノウンが――止まった？』

西大尉がガンダムの後ろ姿を見ていると、レーダーに大きな敵影が映った。
『ヘルキャット４から各機。ＢＥＴＡ出現。要撃級と思われます。数は３』
気づくと、さっきまでガンダムを狙っていたヘリオンの部隊が出現した要撃級へ攻撃を加えていた。
だが、その耐久力は凄まじく、リニアガンでの攻撃を弾き、ヘリオン編隊をなぎ倒していった。
と、要撃級の焦点が観戦席に向く。
『あいつ――殺る気か！？』
要撃級が駆けた。
それは、餌にまっしぐらに襲い掛かる猛獣に似ていた。
『チッ！　間に合えッ！！』
ブーストで突撃を掛ける西大尉だったが、その背後から、機体をビームが貫いた。
「ば――ッ！？」
『ヘルキャット４から大尉、光線級（レーザー）が突如出現。　大尉？　大尉！！？』
爆散するウラヌス。
『大尉ぃ！！？　そんな――このおおおおおおおおおおッ！！！』
鈴那の不知火が突撃銃を連射する。
痙攣しつつ怯む光線級に、鈴那は突っ込む。
「やあああああああああああああッッ！！」
至近距離で突撃銃を連射、その青い機体に血飛沫が掛かる。
光線級は、息絶えていた。
だが、依然と要撃級は健在で、客席を襲っていた。
その時。
上空から巨大な熱線が降り、要撃級を貫いた。
『あれは――！？』

鈴那の目には、新たな機影が二機、映っていた。
『あれも、あのアンノウンの仲間なの――？』
要撃級を一撃で仕留めたガンダムに驚嘆していると、ガンダム四機が合流した。
『ティエリア・アーデ、“ガンダムヴァーチェ”、これよりＢＥＴＡを破砕する』
『アレルヤ・ハプティズム、“ガンダムキュリオス”、人類の障害を排除する』
『お前等、宇宙でのテロの方はどうした？』
合流した二人にロックオンが尋ねる。
『鎮圧は完了した。俺達はスメラギ・李・ノリエガの指示に従い降下したまでだ』
ティエリアと名乗った声に、ロックオンは揚々と応える。
『それは心強い。さあ、見せ付けてやろうぜ？　俺達“ガンダムマイスター”の力をな！！』
勝負は数十秒で付いた。
戦術機が苦戦する要撃級二体を、ガンダム四機はあっという間に倒していた。
『作戦行動、サードフェイズ終了。これより撤退を開始する』
言い残すと、ガンダム四機は緑色の粒子を振りまき、戦域を離脱した。
「西大尉――！　竜也――！　うわあああああああああああああああッッ！！！」
今だ黒煙が上がるウラヌスの残骸と倒れ伏せるナスカを見て、鈴那は大声を上げて泣いた。

「無事ですか？香月博士――！？」
「ええ、なんとか」

四機のガンダムの攻撃のお陰で、観戦席にいた人員の全ての命が救われた。
「ＢＥＴＡをも圧倒する力、ガンダム、か。グラハム、どう思う？」
「好意を抱くよ。興味以上の対象ということさ」
二人の会話を他所に、夕呼はほくそ笑んだ。
「あれはメタトロン技術を応用した兵器ね――調査する必要があるわ。その前に――」
通信機を取り出す夕呼。
「あのナスカとかいう機体、回収出来るかしら？」
それには、大きな思惑があるように見えた。

第四話：楔を打ち込む者たち（後書き）

次回。
香月夕呼によって回収されたナスカと竜也は横浜基地にいた。
大切な仲間を失い傷心した竜也は、ある選択を迫られる――

（次回よりオルタネイティブが交わります。そして、あの男も登場。
ご期待下さい！）

第五話：Ｎａｍｅ～君の名は～（前書き）

ガンダムとの戦闘に破れた竜也は横浜基地の霊安室にいた。
そこで、ある人物の声を聞く。
それは、自分の使命を伝えるものだった。

第五話：Ｎａｍｅ～君の名は～

≪やあ、カヴァー。久しぶりだね。八年ぶりかな？　いや、意識は常に繋がっていたから久しぶりというのはおかしいかな？≫

少年の声が青年の耳元で木霊する。

暗闇の中、竜也はいた。

正確には、ベッドに寝かされていた。

隣には線香が焚かれている。

どうしてこんなところに？と疑問に思う竜也。

彼は、自分がアンノウンに突貫したところまでは覚えていた。

だが、その後のことは胡乱である。

≪ああ、君が何故霊安室にいるかって？　君は、ガンダムに倒され“死んだ”んだ≫

ガンダム？

どこか懐かしい響きだ、と竜也は思った。

≪大変だったんだよ？　君の機体と遺体が回収されたあと、こうして僕は君に“新しい体”を与えたんだ≫

竜也にはよくわからなかった。

自分が死んだことは理解出来たが、新しい体を与えられたという発言が理解出来なかった。

そこで、ふと正気に戻る。

「西大尉は！？　姉さんは！？　壬由は！？」

気がかりなのは家族のことだ。

叫ぶ竜也に、少年は冷たく言い放った。

≪みんな死んだよ。ＢＥＴＡの攻撃でね≫

「そんな――じゃあ、俺は――何故俺だけ――！？」

≪君の意識のバックアップは常に“ヴェーダ”にある。故に、肉体は只の器に過ぎない≫

「俺は、人間じゃ――ないのか？」

失意の中、竜也が尋ねると、声の主は微笑した。
≪そう。人類を超えた存在・“イノベイター”。それが君さ≫
「イノベイター？」
記憶を探る竜也だったが、どうしても過去のことは思い出せなかった。
≪ああ、君の記憶はある程度抹消させて貰ったよ。“僕等の計画”のこととか諸々、ね≫
「お前は何者だ？」
≪僕はリボンズ。リボンズ・アルマーク。君と同じイノベイターさ≫
「リボンズ――アルマーク？」
記憶の底で何かが引っかかったが、竜也は思い出せなかった。
≪君の機体、ナスカ――だったかな？驚いたよ。まさか人間が擬似的にも“ＧＮドライブ”を作ってしまうなんて≫
「ＧＮドライブ？」
≪“太陽炉”のことさ。君も見ただろ？　死に際に。あのガンダムと呼ばれる機体に搭載されている動力源さ。それは、搭載した機体の性能を飛躍的に伸ばし、更には無限活動させる永久機関さ。最も、それは純度の高いメタトロン鉱石がないと製造は無理なんだけどね≫
「ナスカに、そのメタトロンが搭載されているのか？」
≪ご名答。つまり、君がヒデキ・ニシから受け継いだリミッターの解除コードを入れれば、ナスカは真の力を発揮する。そう、ガンダムと同等の力をね≫
そこで、竜也は疑問に思う。
「何故、西大尉はそのコードを？」
≪君が彼と出会ったのは八年前のアラスカだ。何故君がそこにいたか？　それは僕達の意思さ。僕達は、君にある権利を与えたんだ≫
「ある権利？」
≪人類を“来たるべき対話”へと導く権利さ。簡単に言えば、君の責務は世界の監視だ≫
「監視？」

≪人類が誤った方へと進まないよう、君は見届けるんだ≫
「それが、コードと何の関係がある？」
すると、リボンズは再び笑んだ。
≪最初、コードを持っていたのは君なんだよ、リュウヤ・アマツ。それを君は何らかの理由でヒデキ・ニシに譲渡したんだね≫
竜也は驚愕する。
「俺が――コードを！？」
≪あの時――僕等の計画の上ではすでに未来が見えていた。何故なら、イオリアの計画では八年後に太陽炉を持った機体が本格的に動き出す。だから事前に預けておいたのさ、太陽炉の力を引き出す“鍵”を、ね。それから八年。ナスカ製造時、君がパイロットに選ばれたのを知って、機体に僕がちょっと細工をしてね。“メタトロンドライブ”を完全なものへと改造しておいたんだ。ただし、使用には認証コードが必要だ。誰も彼もが使えたら困るからね。“鍵”はそれを解く為のもの。つまり、ナスカは君にしか使えない。要は諜報員さ。僕等イノベイターの目に選ばれたんだよ、君は≫
「諜報員――！？」
≪君は世界の監視と同時に、完成したナスカを使い、ＢＥＴＡの駆逐をする。僕等の研究では、ＢＥＴＡはＧＮ粒子に弱いことが分かっている。人類を対話に導くには、ＢＥＴＡの存在は言わば癌だったのさ。だから、単機でも奴等の巣（ハイヴ）を落とせる力を、君に委ねたんだ。それが“イオリア計画”の一端さ。イオリア計画は動き出した。時は来た。この世界を変革する時が≫
「イオリア――計画――」
言葉に詰まっていると、リボンズは優しい声音で続ける。
≪話を戻そう。君が、すんなり日本（ここ）へと侵入する為には、記憶を失い、日本の軍関係者に拾われることが必要だった≫
「何故、日本に？」
≪そこで本題だ。人類はまず“オルタネイティヴＩＶ計画”を成功させなければならない。それを可能とするのは、君の力なんだよ≫

竜也は黙っていた。あまりにも与えられた情報と使命が大きすぎて処理しきれていなかったのだ。
≪おっと、時間だ。まあ、君の意識と僕の意識は常にリンクしている。何か聞きたければいつでも問うといい。いいかい？　まだ人類が太陽炉と出会うのは少しばかり早い。誰が相手でも、そのデータを悟られないようにしてくれ≫
「俺は――」
≪君はカヴァー。“カヴァー・リインカーネイト”。僕等の同胞。人類を導く者。それを忘れないでくれ。取り敢えずは状況把握だ。君には引き続き諜報活動をして貰う。厭だと言っても意識がリンクしているから逃げられないよ。まずはこの国を立て直すことが優先任務だ。オルタネイティヴＩＶ計画の障害となる存在を一木一草残さず抹消するんだ≫
「俺は、その為に生き返ったのか？」
≪そうだ。もとより君はその為に作られた。いずれ時が来ればわかるさ。いいね？　誰にも悟られるなよ？≫
それを境に、リボンズ・アルマークの声は途絶えた。
「さて。さっきの妙な遺体のデータを――」
そこに、一人の女性士官が入ってきた。
「やあ――」
竜也は柄にも無く気さくに挨拶してみた。
「きゃあああああああああああああっ！！」
女性仕官は気を失い、倒れてしまった。

「で、あんたはなんなの？」
夜の執務室で、竜也は一人の女性に尋問されていた。
その女性こそ、この日本帝国軍・横浜基地の副司令・香月夕呼だった。

「あんた、機体を回収した時は明らかに死んでいた。脈も心拍も無かった。脳だって停止していた。それが、どんな手品を使って生き返ったのだか教えて欲しいものね」
「俺は――」
「夕呼先生、この人、困っていますよ？」
竜也をフォローしたのは一人の少年だった。
少年は、軍人と呼ぶには相応しくない程、平和な顔立ちをしていたが、何か内に秘めるものを感じさせる。
「私にも、にわかには信じられませんが、実際こうして起きている事態ですので信じる他はありませんよ、香月博士」
今度は奥にいる礼服を羽織ったどこか憂いを秘めた顔をした男が言った。
「それより今はこれですよ、夕呼先生！」
言いつつ、少年はモニターに映る映像を指差した。
そこには椅子に座った老人が映っており、杖をつきながら演説をしていた。
『地球で生まれ育った全ての人類に報告させていただきます。私達はソレスタルビーイング。機動兵器ガンダムを所有する私設武装組織です。私達、ソレスタルビーイングの活動目的は、この世界から戦争行為を根絶することにあります。私達は自らの利益の為に行動はしません。戦争根絶という大きな目的の為に、私達は立ち上がったのです。只今を以って、全ての人類に向けて宣言します。領土、宗教、エネルギー、どのような理由があろうとも、私達は全ての戦争行為に対して、武力による介入を開始します。戦争を幇助する国、組織、企業なども、我々の武力介入の対象となります。私達はソレスタルビーイング、この世から戦争を根絶させる為に創設された、武装組織です――』
「ソレスタル――ビーイング――」
竜也が呟くと、夕呼は頭に手を当てて言った。
「どこのキチガイかしらね、これは。戦争根絶？　本当に出来ると

思っているのかしら？」
「それだけの力を、彼等は有しているということでしょうね」
礼服の男が淡々と返した。
「あんた。そう、あんた。確か、そのガンダムとやらと戦って死んだのよね？」
「よくわかりません、記憶が混乱しているもので――」
すると、夕呼は深い溜息をついた。
「この子の上官の西大尉は戦死、他の隊員も生死不明。軍データバンク内のあんたのデータは抹消済み。あんた、一体何者？」
データバンクはリボンズが操作したのだ、と竜也には分かった。
要するに素性を知られるな、ということか。と竜也は理解した。
「貴方の機体、調べさせて貰ったわ。そうしたら、動力源が純度の高いメタトロン鉱石じゃない？　あいつら――ソレスタルビーイングだかのガンダムも、似たような技術を使っていた。もしかして、お仲間だったりするんじゃないのかしら？」
「違うッ！！」
竜也が怒鳴ると執務室がシン、と静まり返った。
と、そこであまり感情的になっては逆に疑われると感じ、竜也は冷静さを取り戻した。
「あんた、“一回目の世界”で会ったことないの？」
夕呼は隣に立つ少年に尋ねるが、少年は首を横に振った。
「いいえ。第一、ソレスタル何たらの武力介入もありませんでしたし、今度の世界は何もかもが違います」
一回目の世界とは？　と竜也は思ったが敢えて黙っていることにした。
「俺、白銀武（しろがねたける）！　聞いた通りこの世界じゃない世界から来た！　君の名前は？」
この世界ではない世界から来た？
何だ、それは――？
思いつつ、竜也は直感した。

この少年を、死なせてはならない。
「俺はリューヤ。リューヤ・天(あまつ)・カーネイト。訳あって西大尉からあの機体を預かった者だ」
「リューヤか、宜しくなっ！」
武が手を差し出す。
その手を握り返す竜也、いや、リューヤ。
「私はシュウ・シラカワ、この基地で行われている計画のオブザーバーです」
礼服の男も名を名乗る。
「ちょっと、あんた達？　まだこの子をうちの部隊に入れるなんて――」
「フッ、ならば私の権限で承認いたしましょう。どうやら、あの機体は彼にしか扱えないようですしね」
シュウと名乗った男が言うと、夕呼は確かに、と言葉を濁らせた。
「仕方が無いわね、今から手続きするから付いてきなさい」
腑に落ちないといった顔で出て行く夕呼。
「気にするな。別の世界から来た男やら、死の淵から甦った男やらで、頭が混乱しているだけだ」
武が言う。
「まあ、兎に角、みんな仲良くやろうぜ？　な？リューヤ！」
「ありがとう、武」
そんな様子を、シュウはどこか憂いだ目で見つめていた。

第五話：Ｎａｍｅ～君の名は～（後書き）

次回。
依然猛威を振るうＢＥＴＡ。
ある日、１０００体のＢＥＴＡが東京に押し寄せる。
東京防衛の任に就くリューヤと武達。
果たして、この圧倒的な戦力差の前に為す術はあるのか？

（今回は戦闘はありませんでした。つまらなかったですよね；
ついでに、主人公の名前も変わりました。宜しくお願いします。
リボンズを出すタイミング、間違えたかな……？）

第六話：目覚めろ、その熱き魂（前書き）

夕呼から横浜基地の真実を聞くリューヤ。
と、同時に佐渡島からおよそ１０００体のＢＥＴＡが侵攻する。
目的地は横浜。
大切なものを守る為にリューヤと武が下した決断とは？
今、ナスカが真の力を解放する！

第六話：目覚めろ、その熱き魂

「ここが貴様の部屋となる」
入隊手続きを終えたリューヤが案内されると、そこには小ぢんまりとした部屋があった。
二段ベッドのある仮眠室のような部屋だ。
「まりもちゃん、もっといい部屋なかったんですか？」
まりもと呼ばれた衛士は言葉の主をキッ、と睨む。
「その呼び方はやめろと言ったはずだが？　白銀武――！」
「すみませんすみません！！」
リューヤに同行した武が、まりもにへこへこと頭を下げる。
すると、まりもは深い溜息を吐いた。
「素性の知れないゾンビ兵はここでももったいないくらいだ」
ちなみに、リューヤが目覚めたとき、霊安室を訪れたのがこの神宮司（じんぐうじ）まりもである。
「あの、さ？　まりもちゃ――いえ、教官？」
「なんだ？」
「教官って確か軍曹ですよね？」
「そうだが？」
「この人、准尉の階級章つけていますよ？」
「――！！」
「おまけに、死亡扱いだから二階級特進で中尉になるのでは？　さっき夕呼先生が書いた書類にも中尉って書いてあったし」
武は、夕呼が行ったリューヤの入隊手続きに同伴していた。
すると、まりもの顔が青ざめた。
「し、失礼しました、中尉殿！　今すぐ別の部屋を用意致します！！」
へこへこと頭を垂れるまりもに、リューヤは無表情のまま、別にいいと言った。

「ですが――」
「いいんだ。少し狭い方が気が落ち着く」
「わかりました。何かご不便等ございましたら何でもお申し付け下さい！」
びしっ、と敬礼し去ってゆくまりも。
「いやー、まりもちゃんのあんな姿、初めて見たよ。あ、口調整えた方が宜しいですか？　中尉？」
「いや、今のままでいい。まりも、ちゃん？　さっきから気になっていたんだが、お前等身内同士か？」
　二人で狭い部屋へと入る。
「ああ、別の世界でね。まりもちゃんは俺達の学校の先生だったんだ」
「お前、この世界の人間じゃないと言ったな？」
「うん、まあ、ね」
「どうやってこの世界に？」
　リューヤが聞くと、武はやれやれとジェスチャーした。
「朝目覚めたらここさ。前にもあったんだけどな」
「前とは、さっき言っていた一回目というやつか？」
「そう」
　暫く沈黙が続く。
「その世界は、一体どんな世界だったんだ？」
　すると、武の顔が悲壮に満ちた。
「最悪さ。オルタネイティヴ？が失敗してオルタネイティヴ？が実行された」
「？？　人類は負けたのか？」
　？が実行されたら人類は敗北する。リボンズ・アルマークの与えた記憶に、そう刻まれていた。
「そうだ。俺は、あの悲劇をもう繰り返したくない。地球が――人類が滅びる様は、もう見たくないんだ――！」
　拳に力を入れる武。

「そのことを知っているのは？　みんなに話したのか？」
「いいや、夕呼先生とシラカワ博士、あとはあんただ」
「何故、俺に話した？」
リューヤが不思議そうな顔をすると、武はあはは、と笑いながら言った。
「何だか俺に似ていたからさ。境遇が似ているから。俺もあんたも、大切なものを失っている。それに、この世にはいないとされた人間だから。かな」
「この世にいない？　だとするとこの世界の本来のお前は――」
「そ。もうとっくに死んでいるらしい」
悲壮とも嘲けとも取れる声音でそう言った。
「そう、か――」
再び、沈黙が続く。
暫くして、リューヤの一言がそれを崩した。
「もうひとつ聞くが、オルタネイティヴ？って何なんだ？　香月夕呼博士は何をしようと――」
「すー」
リューヤが気がつくと、武は椅子に座り寝息を立てていた。
≪オルタネイティヴ？について、詳しい情報が欲しい。このまま彼をマークし、炙り出すんだ≫
「リボンズ・アルマーク！？」
それきり、リボンズの声は途絶えた。
「このままでは風邪をひくぞ――」
リューヤは二段ベッドの下の層に武を寝かせ、自分も上部へと登り、横になった。
「大尉――姉さん――壬由――くそッ！！」
リューヤの目には涙が滲んでいた。
「だが、俺は負けない――この国を守る為にも俺は戦う――！　見ていてくれ、みんな。必ず仇はとる――！」
リューヤも眠りに落ちた。

「おい、リューヤ！　起きろ」
リューヤはその声で目覚めた。
「ようやく起きたか。俺とあんた。呼び出しが掛かっているぜ？」
武だった。
「なんだ――？」
寝ぼけ眼を擦り、立ち上がるリューヤ。
「その前に、お前、どうやってこの部屋に入った？」
すると、武ははあ？　と言いつつ答えた。
「あんたがここに寝かせたんだろ？」
「そうだったか？」
まあいいや、と武は言うと、行こうとリューヤを促した。
それに頷くと、二人は夕呼の執務室へと向かった。

「何かあったんですか、先生？」
部屋に入ると、そこにはウサギの耳のようなアクセサリーを頭につけた少女がいた。
「おはよう、霞」
気さくに挨拶する武だったが返事はない。
「この子は？」
リューヤが尋ねると、武はちょっと困ったように言った。
「社霞（やしろかすみ）、俺のルームメイトだよ」
「お前、女と一緒の部屋なのか？」
「色々あったんだよ！　それに、まだこいつはガキだしいいだろ！？」
「うん――まあ、なあ――」

ふと、リューヤは壬由のことを思い出していた。
確か彼女もこんな感じで――と。
「どうしたんだ？　霞？」
「昨日、帰ってこなかった――」
不機嫌そうに、霞は言った。
「それはだなあ――」
「あ・ん・た・た・ちぃ？」
それを裂く夕呼の声。
「このあたしを無視しようなんざ、いい度胸じゃないの」
怒りの篭った声音が執務室に響く。
「な、なにかあったんですか？　先生？」
武が恐る恐る尋ねると、それを無視して彼女はリューヤに尋ねた。
「あんたの実践記録。静岡でＢＥＴＡと遭遇しているけど？」
「ええ、約２０体程の連中が侵攻してきまして。おまけに小型の巣（ハイヴ）まで作って――」
「２０体、か。それならまだ可愛いもんよ」
「あの、なにか？」
リューヤが聞くと、夕呼は厳かに言う。
「そいつらがどこから来たか。まさか知らないとは言わせないわよ？　中尉」
「ええ、佐渡島から下ってきたんです」
「何故だと思う？」
「何故、とは？」
疑問符を上げるリューヤに夕呼は続ける。
「静岡の隣って何県？」
「神奈川県、ですね」
「ここは何県？」
「神奈川です、ね――」
「夕呼先生、まさか――」
「そうか！」

そこで、リューヤは気づく。
「資料で見たことがある。日本のＢＥＴＡのオリジナルの巣（ハイヴ）は佐渡島と横浜に――まさか！？」
「そう。この横浜基地は巣（ハイヴ）の上に作られた。でも、横浜ハイヴはまだ生きている」
「なん、だって――！？」
言葉に詰まっていると武が代わりに語る。
「つまり、帰巣本能で横浜を目指し現れるということでしたね？」
「そ。だから隣県の静岡で見かけたのも頷けるでしょ？」
「ええ――！」
リューヤが驚いていると、武が言った。
「まさか、また静岡に？」
「もっと最悪。東京よ」
「「なッ――！？」」
リューヤと武は同時に言葉を呑んだ。
「まあ、正確には東京近辺なんだけど、その数が問題なのよ」
「一体何体のＢＥＴＡが――？」
「およそ１０００」
「「１０００！？」」
その、一個大隊も顔負けな数に、二人は慄いた。
「それが横浜に来る、と？」
「このままではね」
「どうすれば――」
砌、リューヤは執務室を飛び出していた。
「リューヤ！？」
全速力で走り、やがて辿り着いたのは戦術機が並べてあるドックだった。
「あった――」
そこに、ナスカはあった。だが、外見は若干変わっていた。
ガンダムに破壊された頭部が、そのガンダム似のものに変わって

いたのだ。
「俺は――世界を、人類を守る――！」
「待てよ！　リューヤ！」
そこに、息を切らせながら武がやってくる。
「お前、何故――！？」
すると、武はにやり、と笑んだ。
「それは、あんたと同じ考えだからだよ。まったく、やっぱ俺達は似ているな」
「ならば行きなさい、二人とも」
唐突に声を掛けられる。
そこにいたのはシュウだった。
「シラカワ博士！？」
驚く武に、シュウは言った。
「あることを踏まえ、ナスカのコックピットは複座型に変更されています」
「何故――！？」
リューヤが問うと、シュウはにやり、と笑った。
「それは、氷川壬由が乗る為です」
「壬由が――壬由が生きているんですか！？」
慌てるリューヤに、シュウはええ、と冷静に答えた。
「先程、中破した機体と共に回収しました。多少怪我はしていますが命に別状はありません」
「よかった――！」
リューヤの目から涙が溢れた。
「泣いている場合じゃねえ！　早くしないと、みんなが――冥夜も委員長も彩峰もたまも美琴も霞も、あんたの家族もみんなあいつ等に食われちまう！！」
「ああ！！」
「取り敢えず、今回はサポートに白銀武、貴方が搭乗して下さい」
「俺が？」

「訓練用の吹雪で出向いても死にに行くだけです」
それはそうだけど、と武が言うと、リューヤはシュウに尋ねた。
「この機体のことはどこまで？」
彼の言葉に、不敵に笑うシュウ。
「さあて。整備したのは私ではないので私は知りませんよ。ただ、調整した整備兵の話では、未知のブラックボックスが存在するとか」
太陽炉のことか。とリューヤは思った。
「そして、こうも言っていました。それが起動すれば、ＢＥＴＡを巣（ハイヴ）ごと消滅させられる、と。」
「出撃許可は下りていませんがいいのですか？」
リューヤが質問すると、シュウはにやり、と笑んだ。
「貴方にそのブラックボックスが開けるのなら、ね」
「それは――」
「まあ、いいでしょう。私の権限で出撃を命じます。リューヤ・天・カーネイト中尉、白銀武訓練兵。ナスカで東京防衛に当たりなさい。首都が墜ちれば、この国は機能しなくなりますからね」
「「はッ！」」
二人はシュウに敬礼すると、ナスカに乗り込んだ。
「メインコックピットはそのままか――」
「こっちには“キャンセルコンボ”用のコマンドカーソルがある――！夕呼先生――！！」
「行くぞ、武。いくら相手が多かろうと、太陽炉を手にするこちらには関係ない！」
「太陽炉？　まあ、いい！　行こうぜ！　行って少しでも敵の数を減らすんだ！！」
「リューヤ・天・カーネイト、ナスカ、出撃するッ！！」
明け空の下、ナスカは二人の勇者を乗せ出撃した。

『こちら特殊任務部隊Ａ－０１第９中隊！援護はまだか！？』
女性の声が通信機越しに木霊する。
『こちら帝国軍司令部。諸君等はそのまま応戦、援軍の到着まで持ちこたえろ』
『援軍って！　いつ来るんですか！？　さっきから援軍援軍ってちっともこないじゃないですか！！』
『落ち着きなさい、茜（あかね）。私達だけでもやれる数だわ』
『嘘！　１０００体のＢＥＴＡになんて勝てるわけないじゃない！！』
砌、茜と呼ばれた少女の不知火の前に、巨大な影が現れる。
『要塞級（フォート）――！？』
『茜！　逃げて！！』
茜と呼ばれた少女の不知火のコックピットに女性の声が響く。
『駄目、光線級（レーザー）に足をやられた――！』
要塞級が大口を開ける。
そのまま、茜の不知火にかぶりつく。
『きゃあああああああああッッ！！！』
『茜ぇぇぇーーーッッ！！！』
（ターゲット・ロック。ファイナル・セーフティコード、解除。解除コード・『次元烈風狩狼哉（じげんれっぷうしゅろうや）』！！）
武に聞こえないように小声でリミッターの解除コード吶喊するリューヤ。
刹那、上空からビームが降り注ぐ。
それを受け、悶える要塞級。
茜が涙で霞む目で空を見上げると、そこには緑色の粒子を放つ羽根を生やした白亜色の機体がいた。
『ビーム！？　嘘――！？　人型にビーム兵器――ソレスタルビーイング！？』
『いえ、違うみたいよ？　あの肩のマーク、静岡基地のだわ――』
『じゃあ、援軍――！？』

驚愕する特殊任務部隊Ａ－０１第９中隊のメンバー。
「頭部にビーム兵器――これは、頭部を付け替えた時に装備された兵装だろう。一体誰が？」
脳裏に一瞬、先程のシュウ・シラカワの顔が浮かんだ。
「やはり整備担当だったのは彼か――」
分析しているリューヤを他所に、武は驚嘆していた。
「これが――この機体の力か！　これならいける！！　こちら――えっと、なんでもいい！　あんた等の援護に来た！」
『援護って――たった一機で！？』
「そうだ。行くぞ、化け物共！　ＧＮアンチ・ビーストブレイド！！　いや、こう呼ぼう！　ディスキャリバー！！！」
リューヤが叫ぶ。ナスカが腰から暁月、いや、ディスキャリバーを抜刀すると、刀身が巨大化、そして緑色の光の刃を纏う。
「これが――世界を導く力だッ！！」
ディスキャリバーを一閃、すると強烈な威圧感を放っていた要塞級が真っ二つになった。
『うそ――要塞級を一撃で――？』
「次！」
叫ぶリューヤだったが、数が多すぎた。
『駄目だよ！　数が多すぎる！』
「それでも、あんたを守ることくらい出来る！」
リューヤの言葉に、茜は絶句した。
「援軍が来るまで――ここで敵を迎撃する」
「あ、ああ――」
武は驚いていた。
衛士等が苦戦するＢＥＴＡをたったの一撃で落としたナスカの力に驚愕していたのだ。
「これって、あのガンダムと同等の力、なのか？　いいぞ――これなら勝てる！」
勇む武の言葉に頷くリューヤ。

飛び掛ってくるＢＥＴＡを次々と大剣で薙ぎ払っていくナスカ。
と、その時。地平線の向こうから敵の本陣が現れた。
「敵影――残り８２０――くっ、多すぎる！！」
「やはり一個大隊ともなると――」
『たった今、撤退命令が出た！　あんた達も撤退して！』
茜が大声を上げる。
「俺は、こいつ等を倒す為にここまで来たんだ――！何としても横浜を――壬由を守る！そして、あんたもな。動けないんだろ？　撤退するなら早く仲間に――」
≪さあ、解き放つんだ、太陽炉の力を。ＧＮ粒子の力を――≫
（リボンズ――！？　まさか、この大群を一気に殲滅する術（すべ）が？）
≪あるさ。広範囲に高濃度のＧＮ粒子を散布すれば、ＧＮ粒子に弱いＢＥＴＡは消滅する≫
「おい、リューヤ――どうする！？」
「これで終わりにする！　名づけて煉獄の炎！　エンプラス・ジ・インフェルノッ！！」
刹那、ナスカのウイングバインダーから大量のＧＮ粒子が周囲に散布される。
広範囲に広がるそれは、ＢＥＴＡの体を溶かしていた。
『嘘――』
言葉を失う茜を始めとした特殊任務部隊Ａ－０１第９中隊。
建物や友軍機は一切ダメージを受けていないのに、１０００体近くいたＢＥＴＡだけが消滅していたからだ。
「これが、太陽炉の力――！？」
「すげえよ！　あんたの機体！　こんなことが出来るなんて！　これさえあれば世界は救える！！」
武の高揚した声がコックピット内に響く。
「勝てた――俺達は勝ったんだ！！」
「ああ。最悪の危機を、俺達は乗り切ったんだ！！」
歓喜の声を上げるリューヤと武。

ウイングスラスターに火を入れるナスカ。
『待って！』
刹那、茜の声がナスカの飛翔を遮った。
『守ってくれて――その、ありがとう――』
「気にするな。俺は、当然のことをしたまでだ」
「俺じゃない、俺達だ」
「そうだな」
「じゃあ、帰ろうぜ、相棒！」
武の言葉で緑色の粒子を振り捲きながら空へと飛翔するナスカ。
それを、茜はまるで天使でも見るかのような面持ちで眺めていた。

第六話：目覚めろ、その熱き魂（後書き）

次回。
一刻も早く衛士になるために訓練を重ねる武。
一方、リューヤは再会した壬由と共にアイランドワンと呼ばれる巨大居住艦を訪れる。
その影で動くテロリスト。
彼等に対し武力介入するソレスタルビーイング。
混乱の戦場に、翔空する影があった。

（主人公の機体。次元烈風狩狼哉。もうお分かりですよね？）

第七話：銀河の妖精（前書き）

帝都ではこれからの日本の行方について会議が行われていた。
そんな中、横浜に停泊中のマクロス艦で“銀河の妖精”シェリル・ノームのライブが開催される。
壬由と再会したリューヤは彼女の為にライブ会場であるマクロス艦へと向かうが、そこには新たな脅威が迫っていた……。

第七話：銀河の妖精

「以上が三鷹での戦闘データです」
暗い会議室でモニターが淡い光を放っている。
「その、緑色の粒子を発する機体が、一気に千体ものＢＥＴＡを消滅させた、と？」
初老の男が声音を上げる。
「はい。諸外国でも、それが確認されています」
「それというのは？」
「ソレスタルビーイングのガンダムです。彼等の放つ粒子には、対ＢＥＴＡの勝利の鍵があるようです」
「では、そのソレスタルビーイングが所有しているというガンダムなる機動兵器と同等の能力を持った機体を、国連軍は、否、横浜は所有していると？」
「はい」
暫し会議はざわついた。閣僚達は思い思いの驚弁をたれている。
「国連軍など、ユニオンの飼い犬ではないか」
「そのユニオンが、ブリタニアと同盟を結んだようです」
なんと、と再びざわつく国会。
「ブリタニア・ユニオンの誕生とでも言いましょうか」
「これで世界は三大国家の闊歩する時代となったか」
初老の男の顔が強張る。
「ブリタニア・ユニオンだけではなく、ＡＥＵもソビエト、否、人革連も我々をよく思っていないようです」
「どの国にも非協力的な我等に嫌気が差したのだろう」
「首相、ブリタニア・ユニオンは新たな安全保障条約を提示してきています」
「最早、国連の力は三大国家の前では風前の灯です」
「近く、三大国家は共同しガンダム鹵獲作戦を決行する模様です」

口々に言う閣僚達。
「そうすれば、あの粒子を放つ機体さえあれば、人類はＢＥＴＡに勝利出来ると？」
首相と呼ばれた男が静かに口を開いた。
「それは先の戦闘が物語っております」
「ならば、横浜からその機体を接収すればよいではないか」
眼鏡を掛けた男が立ち上がった。
「それが、国連軍もその機体のことは詳しく知らない、と」
「だが、手に入れば最早オルタネイティヴ計画になぞ頼らぬでも人類は勝利出来るのであろう？」
「はい、間違いなく。そして、それを三大国家はなそうとしています」
「ガンダムでか？」
「そうです」
「近く、国連ではない世界連合が完成します」
「それに、我が国も加われと？」
「それが条約の主な内容です」
すると、眼鏡の男がいきり立った。
「馬鹿な！　それでは日本はブリタニア・ユニオンの属国となるではないか！」
「ブリタニアの我が国への武力侵攻も、その為のものと」
「我が国は我が国だ！　だから国連の統合計画にも反してきたのではないか！」
「そろそろ、潮時なのやもしれんな」
眼鏡の男の激に、首相は立ち上がる。
「三大国家に抵抗するには国連と協力し、共に歩まねば」
「帝都は我々のものです！　それは将軍閣下の為、古今東西守らねばならないものです！」
「だが、世界は動き出している。もし国連に従順し立場を確立しなければ、ブリタニア・ユニオンの条約を呑むこととなる。でなけれ

ば我々の戦力だけではブリタニアとも、否、ＢＥＴＡとも戦えん」
「その国連とて、今はユニオンの傀儡です！」
激論を交わす首相と眼鏡の男。
「お待ち下さい」
そこで今まで黙って議席に座っていた銀髪の男が口を開く。
「異人は黙っておれ！」
怒鳴る眼鏡の男に、彼は失笑した。
「何故そこまで帝都自衛に拘るのです？　おとなしく国連に下れば、三大国家よりも早くＧＮドラ――、いえ、対ＢＥＴＡ用の機体が手に入るというのに」
「横浜が、あの頑固な男が渡すと思うか？」
首相が言うと、異人の男は不敵に笑う。
「ふふ、私に少々策があります」
すると、国会は静まり返った。
「その、策とやらを聞こうではないか、アイム・ライアード軍事顧問」
首相の言葉に、アイムと呼ばれた男はほくそ笑んだ。

「取り敢えず無事に帰還したことは喜んでやる」
横浜基地の地下エリア。夕呼は先程帰還したリューヤと武を睨んでいた。
「お前等、まさかソレスタルビーイングの飼い犬だったとはな――！」
「ち、違います先生！」
「なら、何故奴等と同じ攻撃が出来た？　あの粒子は何だ？　ガンダムの放つそれとまるで同じじゃあないか」
「話を聞いて下さい、先生！」
「そうですよ、副指令。彼等はソレスタル・ビーイングとは関わり

はありません」
　珍しく取り乱している夕呼をシュウは宥めた。
「ふっ――」
「――？」
「あはははははっ！！　いいぞお前等！　これであたし達は勝てる！　狩狼哉（しゅろうや）だったか？　それと“グランゾン”さえあればオルタネイティヴ？は完遂出来る！」
「ですが、自分にも狩狼哉の詳しいデータはわからな――」
　リューヤが慌てて言うと、夕呼は高らかに笑った。
「そんなもの、このあたしが解析してやるよ！　あんた、とんだジョーカーだよ！」
「しかし、帝都はよく思っていないようです。それだけではありません、先日ブリタニアと同盟を締結したユニオンを始めとする三大国家が、狩狼哉を欲しています」
　シュウの言葉に、夕呼は再び高笑いした。
「そんなもの、オルタネイティヴ？が完遂した暁にはくれてやるよ、パイロットごとな！」
「オルタネイティヴ？――確か“００（ゼロゼロ）ユニット”を造るって――」
　武が言うと、急に上機嫌だった夕呼の顔が強張った。
「完成は間近よ。見てなさい、ユニオンの馬鹿共――オルタネイティヴ？は必ず成功させてみせる」
「あの、オルタネイティヴ？とは？　００ユニット？　全く理解出来ないのですが？」
　リューヤが疑問を口にすると、夕呼はきっ、と彼を睨んだ。
「あんたは知らないでいい――知ったところで何も変わらないのだから。まあ、強いて言えばあんたは００ユニットの護衛ってところね。狩狼哉とグランゾンで守りを固め、００ユニットで道を切り開く感じかしら？」
「まさか、ＢＥＴＡと決戦するつもりですか？」

リューヤの問いに、夕呼は何も答えなかった。
「ほら、武。訓練があるんでしょ？　何か大事な通達があるらしいわ。あとリューヤ中尉。あんたの身内に会いに行かないでいいのかしら？」
「「そうだった！！」」
二人は失礼しました、と駆け足で部屋を後にした。
「００ユニット、そのようなものが本当に製造可能なのですか？」
二人がいなくなった部屋で、シュウが夕呼に尋ねる。
「あら？　あのグランゾンを造った天才科学者が言う台詞とは思えないわね」
「いえ、貴女に造れるのか、ということです。もし失敗すれば、計画はユニオンに接収されるのですよ？」
「その為のグランゾンでしょ？」
すると、シュウの口元がつり上がる。
「ほう、ユニオンとやりあってまで計画を推し進めるつもりですか？」
「ええ。奴等のオルタネイティヴ？、いえ“マクロス・フロンティア計画”なんか決行させないわ――！」
夕呼は、頭を押さえつつ資料に目を通し始めた。それを、シュウはどこかつまらないものでも見るかのような目で見つめていた。

「竜也お兄ちゃん――？」
医務室へリューヤが行くと、そこにはベッドに寝かされた壬由がいた。
「壬由！　無事だったのか！！」
リューヤは壬由を抱きしめた。
「お兄ちゃん、痛い――」
「すまん、つい――でもよかった――姉さんは？」

「わからない――気づいたら私、国連軍に回収されていて――」
「そうか――」
ふと、壬由が目を泳がせると、そこには霞がいた。
「お前、夕呼先生のところにいないと思ったらここにいたのか」
付き添いの武が言うと、霞はこくり、と頷いた。
「なんか、お前等似てんのな」
霞と壬由を見比べつつ、武が言う。
髪の毛の色も、雰囲気も似ていたからだ。
「もしかして、壬由もオルタネイティヴ？の？」
その言葉に、壬由は顔を強張らせた。
「いや、違うならいいんだ。でも、あまりにも霞に似ていたからさ――」
「――失敗作（ロストナンバー）」
「え？」
武が聞き返すと、リューヤが代わりに答えた。
「壬由とは人革連の基地で出会ったんだ。それを、どうしてもと俺の育ての親が連れてきて、な。でも、本当によかった――」
優しく笑み、壬由の頭を撫でるリューヤ。
「なんだ、そんな顔も出来るじゃないか」
武の言葉に疑問符を浮かべるリューヤ。
「お前さ、いつも思いつめた顔ばっかりしててさ。心配してたんだ。本当は辛くて仕方が無いのに痩せ我慢で無感情を装っている。そんな感じだよ」
「そうか？」
リューヤが言うと、武は頷いた。
と、霞が武の服を引っ張った。
「訓練――」
「あ、そうだった！　遅刻しちまう！」
「ありがとう、武」
ふと、リューヤがぽつり、と呟いた。

「へ？」
「いや、なんでもない。ほら、早く行け。軍曹に絞られるぞ？」
「あ、ああ！」
駆け足で医務室から出て行く武を、リューヤと霞が見送った。
「歌姫――」
「え？」
唐突に霞から紡がれた言葉にリューヤは小首を傾げる。
「この街の港に泊まっている居住艦に、シェリル・ノームが来ているって」
霞の言葉に、壬由が続いた。
「シェリル――ノーム？」
リューヤは思い出した。その名前を。
“銀河の妖精”とも言われる人気の美少女歌手のことだった。
「それが、横浜に？」
「横浜港に停泊している“マクロス艦”でライブをやるんだって」
マクロス艦とは、人類が宇宙へと進出すべく作り上げた移民船のことだ。
俗に言う環境宇宙船で、直径１５キロメートルの楕円形をした居住空間を内包しており、そこには山や海、人間や巨人族ゼントラーディと呼ばれる亜人の住む町が広がっている。
「本当か？　そう言えば、お前、シェリル・ノームの歌が好きだったな」
「うん」
壬由がこくり、と無表情のまま頷くと、リューヤは頭を撫でた。
「行ってみるか？」
「うん！」
いつにもなく感情を高揚させ、壬由は頷いた。
「今からチケットは取れないだろうが、行けるだけいってみよう」
「うん！」
リューヤは手を差し出し、「立てるか？」と聞くと、壬由は力強

く頷いた。
「ちょっと足を挫いただけだから」
そう言うと、ベッドから降り立った。
「ばいばい、“お姉ちゃん”――」
霞が抑揚無く言うと、壬由はまたね、と言った。
武の言う通り、壬由と霞の二人は似ていた。その背丈も同じくらいで、外見も異なるのは瞳の色だけのようにリューヤには見えた。
「またな、霞。武を頼んだよ」
「うん――」
そう言い残すと、二人は横浜港を目指した。

リューヤと壬由が横浜港に辿り着くと、そこには巨大なマクロス級戦艦が停泊していた。
その大きさは桁外れで、一隻だけで港を占領していた。
都市を模った移民船団、それがフロンティア船団と呼ばれるもので、この横浜港に停泊している“マクロス・クォーター”もそのうちの一隻である。
中へ入ると、二人は驚いた。
外の世界はＢＥＴＡの侵攻で壊滅的な環境となっているが、マクロス・クォーターの中は帝都のような原型を留めた近未来的な大都市が広がっていたからだ。
更に、超強化ガラスで覆われた天井には、雲が浮かび、青空が広がっていた。
「すごい――」
壬由がきょろきょろ、と首を動かす。
「本来、ＢＥＴＡの侵攻が無ければ日本もこんな世界が広がっていたのかもしれないな」
と、暫く歩くとコンサートホール・星道館へと出た。

そこは観客の長蛇の列が出来ており、“銀河の妖精”シェリル・ノームの人気を物語っていた。
「やっぱり当日券も完売か――」
リューヤが電光掲示板に目をやると、当日券完売の文字が映っていた。
「よう、そこのあんちゃん」
ふと、背後から声を掛けられるリューヤ。
振り返ると、そこにはスーツ姿で茶髪を長く伸ばした丹精な顔立ちの男が立っていた。
恐らく西洋人だろう。
「何か用か？」
「その子とデート中か？」
その男は軽い口調で言った。
「まあ、そんなところだ」
逡巡なく返したリューヤの言葉に頬を赤らめる壬由。
「ひょっとしてシェリル・ノームのライブチケットをお探しで？」
「ああ。だが当日券は完売らしい」
すると、茶髪の西洋人はにやり、と笑んだ。
「だったら俺から買わないか？　安くしとくぜ？」
「お前、ダフ屋か」
「ま、そんなとこだな」
男はポケットから紙切れを取り出す。
そこにはシェリル・ノームのライブの文字が。
「お兄ちゃん――」
物欲しそうに懇願する壬由に頷くと、リューヤは男に尋ねた。
「高いんだろ？」
「まあ、な。アリーナ席だからな」
「幾らだ？」
そう言うと、男はにんまりと笑み、言った。
「カップル割引で一枚五万でどうだ？」

「ご、五万――！？」
「なんせ入手困難な上にアリーナだぜ？　他のファンなら喉から手が出るくらいだ」
リューヤは悩む。二人で十万か、と。
だが、ライブ会場を見つつ思いを馳せている義妹の顔を見ると、やがて嘆息した。
「いいだろう。十万だな？」
「毎度。ツイてるぜ？　あんた」
男に一万円札を十枚渡すと、彼はチケット二枚をリューヤに手渡した。
「お前、兵隊か何かか？」
ふと、リューヤが尋ねる。
「どうしてそう思う？」
男が怪訝そうに聞き返す。
「目を見ればわかるさ。俺だって軍人の端くれだからな」
すると、男は高笑いした。
「そかそか！　こりゃ軍人さん相手じゃ敵わねえわ！　俺、傭兵やってさ。何か困った時はご用命を」
言いつつ、名刺を差し出してくる男。
「ＣＢ――ソルビースト？　聞かない名前だな――」
名刺を眺めていると、男は言った。
「ほら、早く並ばねえとグッズか買えなくなるぜ？」
「ああ、色々ありがとう」
リューヤは喜ぶ壬由の手を引き、ライブ客の列に並んだ。
「ロックオン・ストラトス――」
そこに、一人の中東系の少年がやってくる。
「話しかける相手を間違えた。まさか、見抜かれるとは思っても見なかったぜ」
ロックオンと呼ばれた男は札束をポケットに仕舞うと、少年に尋ねる。

「連中の動きはどうだ？」
「今のところない」
「ティエリアとアレルヤの方からも連絡はねえし、デマであって欲しいがねえ」
すると、少年は無表情のまま言った。
「スメラギ・李・ノリエガの予報は当たる」
その言葉にロックオンはやれやれとジェスチャーした。
「そうですか。じゃあ、もうちょい監視しますか。刹那？　そっちも抜かるなよ？」
「ああ」
刹那と呼ばれた少年が頷いた。

リューヤと壬由はそれから三十分程で会場に入れた。
限定グッズでも買おうかと思ったリューヤだったが、先程十万も磨ってしまったので諦めた。
それ以前に販売列も長蛇のもので、とてもじゃないが参列する気にはなれなかったのだ。
壬由は残念そうだった。
ライブホールに入ると、すでに大勢のファンがライブの開始を待ち望んでいる。
「アリーナのＥ－３１、３２――と」
リューヤと壬由が席に着くと、隣の３３席に変わった少女がいた。
緑色の髪を生やした、子犬のような少女である。
彼女は、ずっと歌を歌っていた。
「それ――」
ふと、普段は自分から知らない人に話しかけない壬由がその少女に話しかけた。
「あ、わかります？　シェリルさんの歌です！」

「上手ですね」
「そうですか！？　ありがとう！　私、ランカ・リー！　貴女は？」
背丈的には壬由と大差が無い少女は彼女を同い年くらいの新たな友人とでも捉えたのであろう。
「氷川壬由です」
「ミユちゃんね！　今日は宜しく！　あ、ペンライト余ってるけどいる？」
「いいの――？」
「うん！」
言うと、ランカは物販コーナーでしか買えない限定ペンライトを壬由に手渡した。
「お兄さんもいります？」
言いつつ、もう一本同じものを差し出すランカ。
「いいのか？」
「ええ。本当は保存用と観賞用にしようと思っていたんですけど、お兄さん達ペンライトないみたいだから」
「ありがとう――」
微笑するリューヤ。いつの間にか、そんな表情が出来るようになった自分に驚きつつ、彼はランカからペンライトを受け取った。

『そろそろだな』
『いいか？　移民なんて考える非国民を、徹底的に叩いてやるんだ！』
マクロス・クォーターの内部に三機の戦術機・吹雪（ふぶき）が侵入する。
敵襲の警報が艦内に鳴り響く。
だが。
『まずはシェリル・ノームのライブ会場を――ぐあああッ！！？』
『どうした！　佐竹！？』

三機の吹雪のうち、左翼を飛んでいた機体が撃墜された。
「テロは嫌いなんだよ――それに、このライブはみんなが楽しみにしてんだ！　ロックオン・ストラトス、狙い撃つぜ――！」
狙撃の射線軸上にはソレスタルビーイングのガンダム、ガンダムデュナメスがいた。
『馬鹿な！？　ガンダム――ソレスタルビーイングだと！？』
「エクシア、目標を駆逐する」
砌、中央のリーダー機が両断され、火球となって地に墜ちる。
『が、ガンダムが二機も！？　性能が違いすぎる！　うわあああああ！！』
「逃がさねえ！」
デュナメスのスナイパーライフルからビームが放たれる。
『がああああ！　メインモニターが！！？』
頭部を狙い撃ちされた最後の吹雪は、蛇行しながら逃げ回る。
だが、それも風前の灯。エクシアに両断されて火塊となった。
「任務完了！　よくやったぜ、刹那」
と、その時だった。
『こちらティエリア・アーデ。アイランドワン内にアンノウンが侵入した』
ロックオンは舌打ちする。
「まだテロリストの仲間が？」
『いや、これは――』
デュナメスとエクシアのモニターに映像が送られてくる。
「こいつは――」
「蟲？」
驚くロックオンと刹那。二人のモニターには赤い蟲のような異形が映っていた。
「ＢＥＴＡ？　いや、違う――“バジュラ”か！」
ロックオンはスナイパーライフルを構える。
「このタイミングで――？　やらせねえぞ、絶対！」

「あ！　始まります！」
ブザーが鳴り、ランカが叫ぶ。
会場が暗くなったかと思うと、ステージに煌々と灯が燈った。
ライブ会場内が、ペンライトの光で満たされる。
そんな幻想的な世界の中、一人の少女の声が響いた。
「みんな！　私の歌を聴けえっ！！」

第七話：銀河の妖精（後書き）

次回。
バジュラの襲撃を受けるマクロス・クォーター。
応戦するガンダムや狩狼哉に、救援が駆けつける。
まるでそれは、救世主の名を冠した運命の矢のようであった。

（次回よりマクロスＦ本格参戦です！）

第八話：アイランドワン防衛戦（前書き）

テロリストの攻撃を防いだソレスタルビーイングだったが、今度はバジュラと呼ばれる異星生命体が現れた。そこに現れる民間軍事プロバイダーのヴァルキリー部隊。ライブが始まった星道館を、彼等は守れるのか？

第八話：アイランドワン防衛戦

まるで夢のような光景だった。
虹色のスポットライトの元、コンピューターとハイテクと“オーバーテクノロジー・マクロス”により生み出される幻想的なホログラフを駆使した演出で、魅せる少女がいた。
その歌声は美しく、同時に力強かった。
虚構の世界の中、凛と咲く一輪の金色の薔薇のようにステージを舞う少女。
それが、それこそが銀河の妖精・シェリル・ノームだった。
観客の大歓声とペンライトの光と同化して煌き響く歌声とその姿は、まさに妖精だった。
「すごい――これがシェリル――これがシェリルなんだ！」
壬由の臨席のランカが感嘆の声を漏らす。
シェリルの圧倒的な歌唱と観客の大歓声に紛れていたが、リューヤの耳には確かに聞こえていた。
「これは、十万払った価値はあったかもな」
一人ぼやくリューヤ。彼も、その圧倒的な美に酔いしれていた。
と、刹那。シェリルの体が宙を舞った。
今度はホログラフ演出などではない。
本当に舞台の天辺から飛び降りたのだ。
息を呑む観客。
だが、そこにひとつの流星が飛来した。
甲冑のような形状をした“ＥＸギア”を纏った影が、落下したシェリルを捉えていた。
翼基部の超小型ジェットを巧みに操り、飛翔した影が、確かにシェリル・ノームを抱きかかえていた。
「アルトくん！」
驚愕ともとれる声音を上げるランカ。

「知り合い？」
壬由が尋ねると、ランカは誇らしげに頷いた。
アルトと呼ばれた影はシェリルを抱きかかえたまま急上昇する。
その一連の流れは、最早優雅というしかなかった。
ままに観客席の上空を旋回するアルトとシェリル。
星道館は、大歓声に包まれた。
そんな様子をうっとりとしたまなざしで見つめる女性が一人。
「ちょっと！　あんなの予定にないですよ！　ミス・グレイス！」
グレイスと呼ばれた女性はこれでいい、と言った。
と、唐突に呟く。
「そろそろね――」

「いいか？　敵は国連軍の防空ラインを突破してこちらに向かっている。強烈な電磁バーストとハッキングで無人戦闘機（ゴースト）を沈黙させているそうだ。ミサイルを当てにするな。近接戦闘で仕留めろ」
アイランドワンの上空を飛翔する三機の戦闘機ＶＦ－２５から通信が漏れる。
声の主はＳ．Ｍ．Ｓと呼ばれる民間軍事プロバイダーの編隊長、オズマ・リーだ。
「ミシェル、ルカ。お前等は１２６番のラインから星道館を通過してアイランドワンに侵入した敵を叩け」
「「了解！」」
と、三機のＶＦ－２５はその敵とエンカウントした。
蟲のような風貌の敵は最早１０体以上侵攻している。
「クラン・クランのピクシー小隊は！？」
ミシェルと呼ばれた少年の声がもう一人の防衛手であるルカに通信した。
「上がっています！　カナリアさんのケーニッヒとアイランドワン

に取り付く大型の敵を掃討中です！」
「援護は期待出来ないってことか――」
落胆のような声を上げるミシェルに、ルカが慌てて言った。
「いえ、援護はあるみたいです！　あれを見て下さい！！」
言われるがままにモニターを睨むミシェルの眼には、青と緑の機体が映った。
「ガンダム――！　ソレスタルビーイングか！？」
「どうやらバジュラ掃討に協力してくれるみたいです！」
「ありがたいというかなんというか、訳のわからない連中だな」
ミシェルが接近してきたバジュラにガンポッドを連射する。
怯むバジュラ。
とどめの一撃を撃ち込もうとした瞬間、ビームがバジュラを貫いた。
炎塊となって落下してゆくバジュラを尻目に、攻撃があった方角を睨むミシェル。
「狙撃――ソレスタルビーイングにも狙撃手（スナイパー）がいるのか――」
そこには、全身を深緑色のシールドで覆い、スナイパーライフルを構えているガンダムの姿が。
「悪りいが手柄の取り合いをしている場合じゃねえんだ。行くぜ、民間の軍人さん達！」
狙撃手、ロックオン・ストラトスのガンダム・ガンダムデュナメスのスナイパーライフルから桃色の粒子が次々と放たれる。
それらはバジュラを的確に捉え、仕留めていた。
「やるね、あいつ。同じスナイパーとして燃えてきたぜ」
ミシェルも奮闘する。
ミサイルを撃ち出し、バジュラを撃破する。
一方、ルカは――
「やばい、取り付かれた！」
背後をバジュラに取られ、逃げ惑っていた。
「このままじゃ――」

砌、ルカのＶＦ－２５を追尾していたバジュラが両断された。
「エクシア、目標の駆逐完了。次の目標を撃破する――」
刹那・Ｆ・セイエイの近接格闘用ガンダム・ガンダムエクシアが撃破したのだ。
「これが――ガンダム――！？」
驚嘆しつつ、ルカも戦場へと戻っていった。

一方、星道館では、避難命令のブザーが鳴り響いていた。
「非難ですって！？　ふざけんじゃないわよ！　あたしのライブはまだ始まったばかりよ！！」
憤慨するシェリルと共に、アルト――早乙女（さおとめ）アルトはいた。
空を見上げる。街並みに目をやる。そこは、赤く燃えた戦場と化していた。
「――なんなの、これ――」
「馬鹿！　ここは危険だ！　早く避難しろ！！」
アルトは逃げ惑う観客の中に、ランカ・リーがいることを知っている。
だが、状況が状況で、ただただ無事を祈るしかなかった。
刹那。コンサートホールの壁をぶち破り、バジュラが首を出していた。
まるでここにいる人々を捕食せんとばかりに。
「あんた達！　早く逃げろ！！」
そこに二人の人影が近づく。
リューヤと壬由だった。
「何よ、あんた達――」
「国連軍の衛士だ。ここは任せろ！」
リューヤは壬由やアルト、シェリルを庇うように立ちはだかり、身構えた。

だが、ライブ故、武器を携帯していないことを思い出した。
「チッ――」
仕方なく、足元に転がっていた鉄屑を掴み構える。
≪大丈夫だよ、カヴァー。呼ぶんだ。君の剣の名を――≫
「リボンズ――アルマーク！？」
脳内に響くリボンズの声に頭を抑えながら、一か八か、その名を叫んだ。
「来いッ！！　狩狼哉ァッッ！！！！」
砌、上空を何かが過ぎった。
その何かは、バジュラを踏みつけるような形で大地に降り立った。
「来た！？」
「ナスカ――！？　でも形が違う――」
驚いている壬由に、事情を説明しようとしたが、踏みつけられたバジュラが反撃に転じる。
なぎ倒された狩狼哉はホールの壁を破壊し、ステージを潰しつつ倒れ込んだ。
「事情説明はあとだ！　壬由、乗れ！！」
鬼気迫るリューヤの言葉に、壬由はおどおどと頷くと、二人で狩狼哉のコックピットへと入った。
「複座式？」
「シラカワ博士の計らいだ。お前も乗れるように、と」
砌、バジュラから生体ミサイルが放たれる。
間一髪、機動し、そのままの姿勢でブーストし、ミサイルを回避しつつバジュラごと星道館から遠ざかってゆく狩狼哉。
「ディスキャリバーッ！！」
破壊され赤く燃える街で睨み合う二体。
先にバジュラが駆けた。
それを、斬獣刀であるディスキャリバーで両断する狩狼哉。

バジュラは、真っ二つになり沈黙した。
「奇妙な連中だ。ＢＥＴＡとは違う異星生命体だとでも言うのか？」
「国連軍のマザーとデータ照合。バジュラと呼ばれているみたい」
後部座席で壬由が呟くように言った。
「バジュラ――」

「ほら、早く逃げるぞ！」
アルトの先導で星道館からの脱出を目指す銀河の妖精・シェリル・ノーム。
その外ではＶＦ－２５の部隊とソレスタルビーイングのガンダム、そして狩狼哉がバジュラと激戦を繰り広げていた。
二人は、無事に逃げ延びられるのだろうか。そして、ランカの運命は？

第八話：アイランドワン防衛戦（後書き）

次回。逃げ惑うアルトとシェリル、そしてランカ。彼等にもバジュラの魔の手が伸びる。その時、アルトは――？

第九話：運命の矢（前書き）

アイランドワンを破壊するバジュラ。
逃げるアルトとシェリル、そしてランカ。
だが、次第にバジュラに追い詰められ――？

第九話：運命の矢

「何なんだ、一体――何が起きているんだよ、これは！」
星道館から抜け出したアルトは驚愕した。
見慣れた街並みは瓦礫の山と化し、そこら中に人の死体が転がっていた。
死体の中には子供もいる。
その惨状に涙を抑えながらも、シェリル・ノームを守り進む。
彼女はアルトに目隠しされながら抱きかかえられていた。
「ランカ――ミシェル――ルカ――無事でいてくれよ――！」

街路の片隅で蹲り震える影があった。
ランカ・リーだ。
彼女は星道館から辛うじて抜け出していた。
だが、目の前の惨状を見てトラウマを思い起こしていたのだ。
それは彼女の過去の記憶。
ひどく狭い宇宙船の脱出カプセル・無残に破壊される脱出カプセル・見知らぬ少年と交わした約束・辺り一面に響く歌声。
その記憶がいつのものか思い起こすよりも、彼女は今生き残ることを考えなければならない。
「助けて――アルトくん――！」
そう念じる彼女のすぐ近くには、一際大きな赤いバジュラが迫っていた。

そんなランカの声を、アルトは聞いた気がした。

燃え盛る街の崩れる音と、逃げ惑う人々の声の中から、彼女の声が聞こえた気がしたのだ。
慌てて辺りを見渡すアルト。
と、わずか先には本当に瓦礫の山の中で腰を抜かしているランカの姿があった。
「ランカッ！！」
だが、近くには赤いバジュラもいて――
バジュラは、アルトとシェリル、というよりもシェリルの存在に気づくとこちらへ迫ってきた。
「もう終わりか！？」
そう思ったアルトだったが、そこに思いもよらない影を見る。
一人の青年だった。ロングコートを着込んだ彼は、手に二メートルはある対デストロイド・ライフルが握られていた。
アルトは知っている。そのライフルは本来二人一組の兵士が使う超重量のものであることを。
しかし、彼はそれを軽々と抱え、跳躍していた。
そして、青年は、無表情のまま、バジュラの背に着地すると、これまた無表情にライフルのトリガーを絞る。
弾丸は、バジュラの体を貫通した。
続けざまに再び跳躍。
ライフルを投げ捨て、今度は左手からナイフの形をした装甲貫徹炸裂弾を取り出し、今しがたライフルで開けたバジュラの傷口に三本投げ込んだ。
爆裂し、傷口を刺激され苦悶の表情を浮かべるバジュラの首に、青年は単子分ワイヤーを巻きつける。
青年はアルトの眼前に着地すると、ワイヤーを手にした腕に力を入れる。
その体からは伝導モーターの駆動音が。
「こいつ、サイボーグか？」
現在のフロンティアの法律では身体強化技術（オーギュメンテーション）や電脳技術（インプラント）は違法だ

が、それはアルトの住むフロンティアだけでそう法律で定めていない船団も多い。
やがて、バジュラの首がごろん、とワイヤーで切断され石畳に落ちた。
「ブレラ！！」
シェリルが大声を上げる。
「シェリル様、お迎えにあがりました」
ブレラと呼ばれた青年は無感情にそう言い、シェリルに一礼する。
それを見てシェリルはアルトの腕から飛び降りる。
「グレイス女史がお待ちです。お急ぎを」
アルトは思い出した。
このサイボーグの青年は公演の際の打ち合わせの時に、シェリルの傍らにいたことを。
「あの時のボディガード――！」
銀河規模のスターであるシェリルに、戦闘用サイボーグの護衛がついていてもおかしくはない、とアルトは納得した。
「待って、ブレラ！」
シェリルはアルトも共に、と言ったがブレラにはその意思に従うつもりはないようだ。
それは、アルト自身も同じだった。
「シェリルのこと、頼むぞ」
「言われるまでもない」
言いつつ、シェリルを抱きかかえるブレラ。
そして、そのまま動き出す。
「待って！　貴方、名前は！？」
遠ざかるシェリルが叫ぶように問いかける。
「アルトだ！　早乙女アルト！　無事でいろよ！！」
彼女を見送ると、彼は本懐を思い出した。
「ランカ――！」
そう。彼はランカを救う為にここに残ったのだ。

「くッ、こいつら速い！」
アイランドワンの天蓋上層。バジュラの侵攻を止める為に戦う者達がいた。
Ｓ．Ｍ．Ｓのピクシー小隊だった。
その中の一人、巨人族（ゼントラーディ）のクラン・クラン小隊長は焦っていた。
青い髪の美女の体躯を、赤い装甲が覆っている。パワード・スーツだ。
必死の抵抗を試みる彼女らだったが、明らかに苦戦していた。
それだけ数が多いのだ。
「何だ？　あいつ等の好きな餌でも、アイランドワンの中にいるとでもいうのか！？」
と、その時。
赤いバジュラが１０匹程、隊列を組み侵入してきた。
「チッ、これではキリがない――！」
言った砌だった。
遠方からピンク色の極太の粒子が飛来し、バジュラの群れを一掃した。
「なんだ！？」
驚くクランの眼には、二機のロボットが映っていた。
「横浜基地の戦術機？　いや、違う――あれは！！」
そこにいたのは戦術機などではなかった。
まるで肥満児のような装甲を纏った白い機体と、それとは対照的な華奢な装甲に体の各部にウイングが付いたオレンジの機体。
「ガンダム――ソレスタルビーイングか！」
クランが大声を上げる。
彼女の声を他所に、二機のガンダムは次々とバジュラを撃墜していく。

そんな激戦の中、そこに二機のＶＦ－２５がアイランドワンの内部から三機の無人戦闘機（ゴースト）と共に飛来した。
「遅れてすみません、クラン大尉！　ルカ・アンジェローニ、到着いたしました！　これより現空域の前線航宙統制を、オズマ・リー少佐より引き継ぎます！」
「俺もいるぜ？　クラン」
ルカとミシェルだった。
「ルカ！　ミシェル！」
ルカとミシェルの眼にも、二機のガンダムが映る。
「あれもガンダム――アイランドワンの中で共闘した連中の友軍か？」
「まあ兎に角、頭数（あたまかず）は多い方がいいですよ！　行って！　シモン！　ヨハネ！　ペテロ！」
ルカが合図すると、無人戦闘機（ゴースト）がバジュラへと向かっていった。
ルカの機体は可変早期警戒管制機（ＡＷＣＳ）と呼ばれる機体で、最新型のフォールド通信ユニットによって、あらゆる電波障害下であろうと味方機の指揮、誘導を可能とする。それは、無人戦闘機（ゴースト）と例外ではなかった。彼等は、ルカの忠実な僕だ。
「無人機の誘導、か。Ｓ．Ｍ．Ｓの技術も捨てたものではないね」
オレンジ色のガンダムのパイロットが白い重装甲ガンダムに通信を送る。
「だが、この数、それだけでは覆せまい。ロックオン・ストラトスと刹那・Ｆ・セイエイは“ヴェーダ”の指示通り動いているだろうか」
「恐らく大丈夫だよ、ティエリア。仮に刹那がヘマをしてもロックオンがフォローしてくれるさ」
「ならいいのだが」
不安を拭い去れない、といった感じの溜息を吐くティエリアと呼ばれた声。
だが、彼はすぐに頭を戦闘へと切り替えた。

オレンジのガンダムのパイロットも同様である。
「ティエリア・アーデ、ガンダムヴァーチェ、目標・バジュラを破砕する」
「アレルヤ・ハプティズム、ガンダムキュリオス、人類の脅威を排除する」
二機のガンダムとＳ．Ｍ．Ｓの部隊がバジュラを駆逐していく。
戦いの神は、人類側に味方していた。

「ランカ！」
「アルトくん！」
アルトの救援でランカの顔に安堵の情が篭る。
だが、それは爆音によって遮られた。
超低空、彼等の頭上を一機のＶＦ－２５（バルキリー）が掠めていった。
黒と赤で染められた、この戦場とは不釣合いなまでに美しい機体だった。
「ＶＦ－２５メサイア！？　あんな最新鋭機、いつの間に実戦配備されていたんだ！？」
しかし、戦況は救世主に味方しなかった。
航高度が低かった為、“ガヴォーク”と呼ばれる高機動形態へと変形するＶＦ－２５。
アルトとランカの前に盾のように聳えた彼だったが――
そこに、バジュラが飛び掛った。
その一撃でＶＦ－２５はビルに叩きつけられた。
バジュラの豪腕がＶＦ－２５の細い体を締め付ける。
ＶＦ－２５は右手に握ったガンポッドで必死の抵抗を試みるが、無駄に終った。
「くそおおおおお！　蟲共がああああッ！！」

ＶＦ－２５から男の声が漏れた。
声の主はコックピットを開放すると、ＥＸギアで脱出した。
でも、男は逃げるのではなかった。
後ろにいる、アルト達を守る為になお戦おうとしていた。
彼の手には大型アサルトライフルが握られており、すぐさまマズルフラッシュを刻んだ。
だが、そんなヒーローも無敵ではなかった。
バジュラの爪がライフルの弾を弾きながら男を掴んだ。
「し――ぬ――あの男、死ぬ、のか――？」
アルトには男の結末が見えていた。
「やめろおおおおおおッッ！！！」
アルトは叫んだ。
それでも、バジュラが止まるはずがない。
男はバジュラの爪で両断されて、下半身と臓器が石畳にぼたぼたと落下した。
石畳には異臭交じりの血溜まりと臓物の山が出来ていた。
男は、アルトとランカを守って死んだのだ。
「いやあああああッッ！！！」
ランカが悲鳴を上げる。
それにそそられたかのように今しがた男を殺したバジュラがランカに迫る。
どうする？どうすればいい？
ランカを助けるには、自分達を守って死んだ名も知らぬ男の遺志と尊厳を守るにはどうすればいか。
否。自分だけ逃げるか。
アルトの足が、動いていた。
それは、逃げるのではなく進む為に。力強く踏み出し、目の前にある希望の前へ。
その希望こそ、ＶＦ－２５Ｆメサイア、名も知らぬ英雄が残した力。

アルトは逡巡なくメサイアに乗り込んだ。
まだ英雄の温もりが残るシートに、アルトは座る。
「頼む――動け――動いてくれ――！」
そんな様子を見たバジュラが興味を引かれたのか、アルトを一瞥した。
だが、現実はそう甘くはなかった。
背にしていたビルが爆発する。
別のバジュラの生体ミサイルだ。
吹き飛びバランスを崩すメサイア。
「うわあああッ！！」
死ぬのか？
俺は、ランカも守れず、あの名も知らない男の遺志も継げず死んで逝くのか？
アルトはそう思った。
背後には今しがた吹き飛んだビルの瓦礫を踏み鳴らしながら迫るバジュラの姿が。
ここで終るのか？
でも、違った。
迫るバジュラが、一瞬にして真っ二つになった。
「大丈夫か！？」
そこには、白亜色の機体・狩狼哉がいた。
リューヤが、ディスキャリバーで両断したのだ。
「戦えないなら逃げろ！　あとは引き受ける！！」
身構える狩狼哉に、アルトは不敵に答えた。
「誰が逃げるって言った！　俺は戦う！　戦える！！」
すると、倒れていたメサイアが立ち上がった。
「飛べええええええええッッ！！！」
砌、メサイアの背部バーニアが火を噴いた。
そのまま、ランカを襲うバジュラに突貫する。
体当たりでバジュラを吹き飛ばすと、アルトはガンポッドを連射

した。
「くそ！　くそ！　消えろ！！　消えろおおおおッッ！！！」
ぶつける。
怒りを、憤りをぶつける。
無残にも殺されていった人々の無念をぶつける。
闇雲な攻撃だったが、やがてバジュラは動かなくなった。
「ランカ！　無事か！！」
そこに、別のＶＦ－２５が飛来する。
「お兄ちゃん！」
「お――お兄ちゃん？」
それは、Ｓ．Ｍ．Ｓのオズマ・リーだった。
「ヘンリーは――」
言いかけたオズマだったが、モニター脇に映る肉塊を見て納得した。
「お前は、誰だ？」
オズマがアルトに問う。
「俺は――」
刹那。オズマのＶＦ－２５に生体ミサイルが直撃した。
崩れ落ちるＶＦ－２５。
「お兄ちゃん！？」
叫ぶランカ。
「まだいるのか――！」
「あとは任せろ。お前はそのバルキリーと女の子を連れて安全なところへ！」
リューヤがアルトに言う。
「わかった。すまない――ランカ！　乗れ！！」
メサイアの腕のマニュピレーターを差し出すアルトだったが、ランカは取り乱していた。
「あたし、あのことちゃんと内緒にするよ！？　誰にも話してないよ！　だから、だから――！」

その時、何かが起こった。

「なんだ――様子がおかしい――」
バジュラと交戦していたガンダムエクシア、刹那・F・セイエイが言う。
「バジュラが撤退していく――？」
ガンダムデュナメスのライフルの照準を覗いていたロックオン・ストラトスがそれに気づいた。

「何だ、これ」
ルカが戸惑っている。それは、正体不明のフォールド波が計測されたからだ。
「どうした、ルカ！　明瞭な指示を頼む！」
クランが怒鳴ると、ルカは慌てて言った。
「すみません、クラン大尉！　正体不明のフォールド波が計測されています。それに、バジュラが撤退を始めました！」
「何！？」
「原因はわかりません――フォールド波の発信源も不明、一体、何が起きているんだ！？」
「どうせ正体不明の敵なんだ。ルカ、管制に集中してくれ。ピクシーを中心にアポロ小隊、エンゼル小隊と追撃に移る！　敵が何であれ、ここで数を減らすぞ！」
いきり立つクランの様子を、ティエリアとアレルヤが見ていた。
「どうやら、僕等の出番も終わりのようだね」
『ティエリア！　アレルヤ！　無事か！？』
二人のガンダムのコックピットにロックオンの声が木霊する。

「ああ、大丈夫だ」
無感情に答えるティエリアだったが、彼もバジュラの突然の戦線離脱を疑心していた。
『何はともあれ目的は果たした。帰投するぞ！』
四機のガンダムが、ＧＮ粒子を振り撒きながら翔空しアイランドワンから引き上げて行った。
たった今、オズマを攻撃したバジュラも例外ではなかった。
その場から飛び去るバジュラを見て、リューヤは決断した。
「バジュラが退く――？　あとはＳ．Ｍ．Ｓに任せよう。横浜基地が心配だ。帰還するぞ、壬由」
「うん――」
リューヤと壬由もまた、撤退していった。
残されたのはあっけに取られるアルトと、兄・オズマにすがるランカだけだった。

第九話：運命の矢（後書き）

リューヤがアイランドワンへと出掛けた同時刻。
武は重大な知らせを聞く。
それは、最終訓練の話だった。
合格すれば、晴れて衛士となれる。
武はみんなの運命を変えられるのか？
同時に現れる謎の生命体。
果たして、彼等の正体とは？

第十話：変わり始める世界（前書き）

アイランド１でバジュラを撃退したリューヤとソレスタルビーイング。一方、横浜ハイヴでは武達が最終試験に挑んでいた。

第十話：変わり始める世界

「数多の並行を辿(たど)する我等にとって、この出来事も所詮、泡沫(うたかた)の夢。いずれ泡沫(ほうまつ)のように消え失せ、そして零(む)へと回帰する」

暗闇で、暗闇より深い黒の巨人が男の声で呟くように言う。

「だが、今回ばかりは例外と見える。“スフィア”の存在に気づいたものがいる――スフィアが起動すれば、事象現象が捻じ曲げられ、我々“監視者”では手に負えない歪(ひずみ)を生むこととなる」

いつの間にか、暗黒の巨人の隣にもう一体の暗黒の巨人の姿が。

こちらは悪魔のようにも見える隣の巨人に対して死神のような風貌を持っていた。

「間違いは正さねばならぬ。我等は繰り返すわけにはいかぬのだ。あの時やかの時の出来事を」

すると、暗黒の死神が微動した。

「統べてを終わらせる気か？　多くのモノを失って」

少年のような声音のその言葉に、暗黒の悪魔は失笑した。

そして、すぐに元の口調へと戻る。

「否。始め直すのだ。この不退転の因果の中でその鎖を断ち切る。それこそ我々の真の役割――因果を統べる魔神(アストラナガン)の使命なり」

黒い悪魔が手を虚空に翳す。

すると、そこには蒼く美しい球体――地球の様子が映っていた。

「ＢＥＴＡ、フェストゥム――それだけでは済まぬ。済まぬまい。いずれ、外敵はこの蒼き宝石を奪いに次々と襲来するだろう。最早、イノベイターだけでは太刀打ち出来まいよ」

感慨深く言った悪魔の声に、死神の少年は尋ねる。

「では、どうする？」

それに逡巡なく答える悪魔の男。

「お前の仕事ぞ、“アイン”。お前は因果を裂き運命を絶ちあの世界へ往かねばならない。もう世界を悪巡回させるわけにはいかぬ。

この不退転の闇から開放せねばならぬ」
彼の言葉に頷くと、アインと呼ばれた少年・死神のような機体が翼を広げた。
「了解した。今度こそ、彼等の旅路に安息を与える。それが、世界の運命因果のｄｉｓ（アンチテーゼ）として生まれた俺の使命――」
やがて、死神は飛び立った。暗黒より深い暗黒の粒子を振りまきながら、暗黒を掛ける。
そして、暫くして姿が消え失せ見えなくなっていた。
「繰り返される悲劇に、今度こそ幕を――」
死神の少年を見送った悪魔の男は静かに闇の中へと消えた。

横浜ハイヴ周辺・森林地帯。
６機の戦術機・吹雪が巨大な体躯を持つＢＥＴＡと交戦していた。
「そっちへ行ったぞ！　彩峰（あやみね）！！」
「わかった」
彩峰と呼ばれた少女の吹雪のマシンガンから砲弾が無数に放たれる。
それは、一体の巨大ＢＥＴＡに命中し爆ぜた。
体を痙攣させつつ反撃に転ずるＢＥＴＡ。
「委員長！　フォローを！！」
「了解！」
またしても、今度は別の箇所から弾丸の雨がＢＥＴＡに降り注ぐ。
それでも死なぬＢＥＴＡ。
「ち、意外にタフだな――流石ラスボスだ――」
巨大ＢＥＴＡが腕を振り上げる。
続けざまに、ままに振り下ろす。
それを回避する３機の吹雪。
「今だ！　たま！！」

「はいっ！！」
森の中から巨大な弾丸が疾駆する。
狙撃である。
その弾丸はＢＥＴＡの頭の半分を吹き飛ばした。
「やった――？」
「まだだ、ミコト！　そっちに攻撃が行くぞ！！」
ミコトと呼ばれた少女の吹雪に、ＢＥＴＡの触手が迫る。
間一髪交わすと、ミコトの吹雪はそれを握り締めた。
攻撃を止められ身動ぎするＢＥＴＡ。
「いいぞ！　往け！　終わりだ！！　冥夜（めいや）！！！」
森からブレードを携えた影が飛び出る。
それは踊るように剣戟を繰り出す。
やがて、ＢＥＴＡの首は完全に落ち、生命機能が停止した。
「よし、上出来だ！」
「いい指示だった、タケル！」
たった今ＢＥＴＡを斬り裂いた冥夜と呼ばれた少女の吹雪がタケルと呼んだ少年の吹雪に近づく。
「なあに、これがチームワークってやつさ。な、分隊長？」
「そう、ね――」
息を切らせながら先程委員長と呼ばれた少女が応える。
「みんな、よくやった。これにて最終シミュレーションを終了する」
暗室に並ぶカプセル型の筐体から、六人の訓練兵が這い出るように現れた。
「ふう、きつかったぁ！！」
伸びをしながら白銀武が嬉しそうに言う。
そこに、桃色の髪の小柄な少女、中性的な少女、眼鏡を掛けた三つ編みの少女、どこか近寄りがたい雰囲気の少女、そして青い長髪を携えた、凛とした武士のような少女が武のもとに寄ってくる。
「これにて最終試験は終了だ。審査結果は後日報告する。みんな、よくやった」

神宮司まりも教官がどこか嬉しそうに告げる。気分が高揚している、というか武達の連携プレーに驚いているようだ。
訓練終了の合図を受け、解散しようとした5人の少女を武が呼び止める。
「なあ、みんなに紹介したい奴がいるんだ。今はアイランドワンに出かけていていないが、もうすぐ帰ってくると思う」
「新しいお友達、ですか？」
ピンク色の髪の少女が小首を傾げる。
「いい奴だから、たまもすぐに仲良くなれると思う。冥夜も彩峰も委員長もミコトも、な」
と、その時だった。
基地の警報が鳴り響いた。
「敵襲！？　ＢＥＴＡか！？」
まりもが叫ぶように言うと、モニターに敵と思われるモノが映し出された。
それは、漆黒の怪獣のような異形と、赤く背中に黒い翼を携えた機体と、同じくらいの全長の紫色の体躯に背部に蟹の鋏のような武装を持った機体だった。
「ＢＥＴＡじゃ、ない――？　しかもあの赤いのと紫色の機体、まるで――」
「ガンダム――！？」
冥夜とミコトが口々に言うと、武は駆け出していた。
「タケル！？　どこへ！？」
ソレスタルビーイングのガンダムかとも思ったが、肩に帝国軍の紋章が刻まれているのに気づいたのだ。
「何故、帝国軍が――まさか、狙いは狩狼哉か！？」
勘の鋭い彼には来訪者の目的がすぐに分かった。
だが、二つ分からないことがあった。
何故帝国軍がガンダムを所持しているのか？
そして。

何故彼等は怪獣の群れを連れているのか？
考えても答えが出ない。
故に武は直接尋ねてみることにした。
そう。来訪者に。

アイランドワン・廃墟。
リューヤに逃がされた早乙女アルトには、先程負傷したパイロットの応急処置くらいしかできなかった。
その横ではランカか泣きじゃくっている。
そんな場所に、一機のバルキリーが降下してくる。
青いＶＦ－２５のガヴォーグだった。
機体には自身の乗っているものや負傷したパイロットの機体と同じ紋章が描かれていた。
と、コックピットから出てきた人影にアルトは絶句した。
ミシェル・ブラン、美星学園の同輩で、自身より正確に空を飛べる少年だ。
「民間軍人プロバイダー、Ｓ．Ｍ．Ｓのミハエル・ブラン少尉だ」
「ミシェル――？」
驚愕を隠せない、といったアルトに彼は冷徹に告げる。
「貴君の援護には感謝するが、ＶＦ－２５は当社の最新鋭機であり、新統合法に指定された軍事機密でもある。追って、貴君には然るべき筋から連絡をさせて貰う」
アルトには世界が、たった数時間で変わった。そんな気がした。
同時にもう戻れない。そう、感じていた。

帝国国防省・戦術機技術開発研究所・第三地下格納庫。

バロン西とその仲間という尊い犠牲を払って帰還した篁唯依は、ありのままの出来事を上官である巖谷中佐に報告した。
「ニュースで見た。ソレスタルビーイング、行動が矛盾している」
その言葉になにも返さない唯依に、中佐は優しく言った。
「西少佐や天津姉弟の死は貴様のせいではない」
「でも――私にもっと力があれば――少なくとも天津姉弟は救えたはずです！」
そこで唯依ははっ、とした。上官である中佐の発言に反論するなど、軍人のすることではないと思ったからだ。
「力が、欲しいか？」
「え――？」
思わず聞き返す唯依。
「お前の弱さを克服する力が欲しいか、と聞いている」
その言葉に首肯すると、巖谷中佐は厳かに告げる。
「篁中尉。貴様の戦術機に対する知識と技能、及び真の力を求める姿を見込み、特別任務を与える」
「特別任務――でありますか？」
彼女の復唱を咀嚼するように聞いた中佐は、同じく峻厳な声音で続ける。
「そうだ、貴様にはアラスカへ飛んで貰う」
唯依は絶句した。
ここにも、世界が変わろうとしている者がいたのだった。

帝国国防省官邸・廊下。
「アイム・ライアード！　何だ、あの怪物は！！」
眼鏡を掛けた軍人が銀髪の異人に怒声を浴びせる。
「それに二機ものガンダム――本国は何も聞いていないぞ！？」
すると、アイムと呼ばれた男はにやりと笑み、低い声で言った。

「あれが、あれこそが戦術機に変わる新たなる我が国の力ですよ。戦術機には衛士が乗り込む。であれば、相手に凌駕された時、どうなるかお分かりでしょう？」
「それは名誉の戦死だ！」
眼鏡の男の堅物さにやれやれ、とジェスチャーすると、アイムは続ける。
「あの“次元獣”はパイロットの要らない戦術機のようなもの。つまり、無駄な血を流さずにＢＥＴＡを駆逐出来ます。それとも何ですか？　貴方はそれでも無数の衛士を犬死させたいのですか？　彼等は有能です。言われた通りに動き、言われた通り対象を縊り殺す。おまけに人工生命体なので衛士が搭乗し死ぬことはない。これ以上にエコな兵器はないと思いますよ？」
「では、あのガンダムは？」
「あれは模造品です。戦術機のデータとガンダムのデータ――最も、そちらはブラックボックスが多かったのですが、それ等を元に私が作り上げた最高傑作ですよ。故にあの粒子は搭載してはおりませぬが――“貴方達以上”の戦果を挙げてくれることでしょう」
くく、と笑みながら廊下を進歩していくアイムに、眼鏡の軍人は歯噛みすることしか出来なかった。
「さて、狩りの始まりです。私の“黒羊のスフィア”が命じています。あの方を――無限獄へ堕とせ、とね。クククッ！」

第十話：変わり始める世界（後書き）

次回。
二機のガンダムと次元獣に単身戦いを挑む武。
そこに、新たな戦士が舞い降りる。

（更新遅れてすみません！　次回、あの機体が現れます！）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4656t/

スーパーリアルロボット大戦

2011年10月18日03時33分発行